



**「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」
に係る一般競争入札**

(総合評価落札方式)

入札説明書

2024年1月31日

独立行政法人情報処理推進機構

目 次

I. 入札説明書.....	1
II. 契約書.....	8
III. 仕様書.....	17
IV. 入札資料作成要領.....	34
V. 評価項目一覧.....	41
VI. 評価手順書.....	47
VII. その他関係資料.....	51

I. 入札説明書

独立行政法人情報処理推進機構の請負契約に係る入札公告（2024年1月31日付け公告）に基づく入札については、関係法令並びに独立行政法人情報処理推進機構会計規程及び同入札心得に定めるもののほか、下記に定めるところにより実施する。

記

1. 競争入札に付する事項

- | | |
|-----------|---|
| (1) 作業の名称 | 情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務 |
| (2) 作業内容等 | 別紙仕様書のとおり。 |
| (3) 履行期限 | 別紙仕様書のとおり。 |
| (4) 入札方法 | 落札者の決定は総合評価落札方式をもって行うので、
① 入札に参加を希望する者（以下「入札者」という。）は「6. (4) 提出書類一覧」に記載の提出書類を提出すること。
② 上記①の提出書類のうち提案書については、入札資料作成要領に従って作成、提出すること。
③ 上記①の提出書類のうち、入札書については仕様書及び契約書案に定めるところにより、入札金額を見積るものとする。入札金額は、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に関する総価とし、総価には本件業務に係る一切の費用を含むものとする。
④ 落札決定に当たっては、入札書に記載された金額に当該金額の10パーセントに相当する額を加算した金額（当該金額に1円未満の端数が生じたときは、その端数金額を切捨てるものとする。）をもって落札価格とするので、入札者は、消費税及び地方消費税に係る課税事業者であるか免税事業者であるかを問わず、見積もった契約金額の110分の100に相当する金額を入札書に記載すること。
⑤ 入札者は、提出した入札書の引き換え、変更又は取り消しをすることはできないものとする。 |

2. 競争参加資格

- (1) 予算決算及び会計令（以下「予決令」という。）第70条の規定に該当しない者であること。
なお、未成年者、被保佐人又は被補助人であって、契約締結のために必要な同意を得ている者は、同条中、特別の理由がある場合に該当する。
- (2) 予決令第71条の規定に該当しない者であること。
- (3) 令和4・5・6年度競争参加資格（全省庁統一資格）において「役務の提供等」で、「A」、「B」又は「C」の等級に格付けされ、関東・甲信越地域の資格を有する者であること。
- (4) 各省各庁及び政府関係法人等から取引停止又は指名停止処分等を受けていない者（理事長が特に認める場合を含む。）であること。
- (5) 経営の状況又は信用度が極度に悪化していないと認められる者であり、適正な契約の履行が確保される者であること。
- (6) 別掲1の資料の交付を受けた者であること。
- (7) 過去3年以内に情報管理の不備を理由に機構から契約を解除されている者ではないこと。

3. 入札者の義務

- (1) 入札者は、当入札説明書及び独立行政法人情報処理推進機構入札心得を了知のうえ、入札に参加しなければならない。
- (2) 入札者は、当機構が交付する仕様書に基づいて提案書を作成し、これを入札書に添付して入札書等の提出期限内に提出しなければならない。また、開札日の前日までの間において当機構から当該書類に関して説明を求められた場合は、これに応じなければならない。
- (3) 入札者は、代表者印を押印した秘密保持誓約書（別掲2を参照）を提出した上で、機構から本業務に係る教材資料等（別掲1を参照）の貸与を受け、6. (1) 受付期間最終日（2024年3月11日）の15時ま

でに必ず機構に返却しなければならない。

なお、教材資料等の交付期間は2024年2月1日（木）から2024年2月29日（木）までの月曜日から金曜日（祝祭日は除く）の10時から17時（12時30分～13時30分の間は除く）とする。貸与を希望する者は、事前に14.（4）担当部署へ電子メールにより依頼すること。また貸与に当たって機構に来訪する際には、本人確認のため顔写真付きの身分証明書（運転免許証、マイナンバーカード、パスポート等）を提示すること。

4. 入札説明会の日時及び場所

(1) 入札説明会の日時

2024年2月15日（木） 11時00分

(2) 入札説明会の場所

オンラインによる説明会とする。Web会議ツール等を用いて実施する関係上、参加者のメールアドレス宛へ招待メールを送信する必要があるため、2024年2月14日（水）15時00分までに14.（4）の担当部署まで電子メールにより申し込むこと。

5. 入札に関する質問の受付等

(1) 質問の方法

質問書（様式1）に所定事項を記入の上、電子メールにより提出すること。

(2) 受付期間

2024年2月19日（月）から2024年2月29日（木） 17時まで。

なお、質問に対する回答に時間がかかる場合があるため、余裕をみて提出すること。

(3) 担当部署

14.（4）のとおり

6. 入札書等の提出方法及び提出期限等

(1) 受付期間

2024年3月7日（木）から2024年3月11日（月）。

持参の場合の受付時間は、月曜日から金曜日（祝祭日は除く）の10時00分から17時00分（12時30分～13時30分の間は除く）とする。

(2) 提出期限

2024年3月11日（月） 17時必着。

上記期限を過ぎた入札書等はいかなる理由があっても受け取らない。

(3) 提出先

14.（4）のとおり。

(4) 提出書類一覧

No.	提出書類		部数
①	委任状（代理人に委任する場合）	様式2	1通
②	入札書（封緘）	様式3	1通
③	提案書	—	1部
④	評価項目一覧	—	1部
⑤	令和4・5・6年度競争参加資格（全省庁統一資格）における資格審査結果通知書の写し	—	1通
⑥	③と④の電子媒体	CD-R 又は DVD-R	一式
⑦	提案書受理票	様式4	1通

(5) 提出方法

① 入札書等提出書類を持参により提出する場合

入札書を封筒に入れ封緘し、封皮に氏名（法人の場合は商号又は名称）、宛先（14.（4）の担当者

名)を記載するとともに「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務 一般競争入札に係る入札書在中」と朱書きし、その他提出書類一式と併せ封筒に入れ封緘し、その封皮に氏名(法人の場合はその商号又は名称)、宛先(14.(4)の担当者名)を記載し、かつ、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務 一般競争入札に係る提出書類一式在中」と朱書きすること。

(2) 入札書等提出書類を郵便等(書留)により提出する場合

二重封筒とし、表封筒に「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務 一般競争入札に係る提出書類一式在中」と朱書きし、中封筒の封皮には直接提出する場合と同様とすること。

(6) 提出後

① 入札書等提出書類を受理した場合は、提案書受理票を入札者に交付する。なお、受理した提案書等は評価結果に関わらず返却しない。

② ヒアリングを次の日程で実施する。なお、ヒアリングについては、提案内容を熟知した実施責任者等が対応すること。

日時：2024年3月14日(木) 10時30分～17時30分の間(1者あたり1時間を予定)

場所：東京都文京区本駒込2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス13階

独立行政法人情報処理推進機構 会議室D

※オンラインまたは電子メールや電話等の手段によるヒアリングを行う場合がある。

情報処理推進機構の指示に従うこと。

7. 開札の日時及び場所

(1) 開札の日時

2024年3月26日(火) 11時00分

(2) 開札の場所

東京都文京区本駒込2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス13階

独立行政法人情報処理推進機構 会議室A

8. 入札の無効

競争入札に参加する者に必要な資格のない者による入札及び競争入札に参加する者に求められる義務に違反した入札は無効とする。

9. 落札者の決定方法

独立行政法人情報処理推進機構会計規程第29条の規定に基づいて作成された予定価格の制限の範囲内で、当機構が入札説明書で指定する要求事項のうち、必須とした項目の最低限の要求をすべて満たしている提案をした入札者の中から、当機構が定める総合評価の方法をもって落札者を定めるものとする。ただし、落札者となるべき者の入札価格によっては、その者により当該契約の内容に適合した履行がなされないおそれがあると認められるとき、又はその者と契約することが公正な取引の秩序を乱すこととなるおそれがある著しく不相当であると認められるときは、予定価格の範囲内の価格をもって入札をした他の者のうち、評価の最も高い者を落札者とするところがある。

10. 入札保証金及び契約保証金 全額免除

11. 契約書作成の要否 要(Ⅱ. 契約書(案)を参照)

12. 支払の条件

契約代金は、業務の完了後、当機構が適法な支払請求書を受理した日の属する月の翌月末日までに支払うものとする。

13. 契約者の氏名並びにその所属先の名称及び所在地

〒113-6591 東京都文京区本駒込2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス16階

独立行政法人情報処理推進機構 理事長 齊藤 裕

14. その他

- (1) 入札者は、提出した証明書等について説明を求められた場合は、自己の責任において速やかに書面をもって説明しなければならない。
- (2) 契約に係る情報については、機構ウェブサイトにて機構会計規程等に基づき公表^(注)するものとする。
- (3) 落札者は、契約締結時までに入札内訳書及び提案書の電子データを提出するものとする。
- (4) 入札説明会への参加申込み、仕様書に関する照会先、入札に関する質問の受付、入札書類の提出先

〒113-6591

東京都文京区本駒込2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス15階

独立行政法人情報処理推進機構

デジタル人材センター 国家資格・試験部 登録・講習グループ 担当：小川、中田

E-mail：dhrc-riss-koubo@ipa.go.jp

なお、直接提出する場合は、文京グリーンコートセンターオフィス13階の当機構総合受付を訪問すること。

- (5) 入札行為に関する照会先

独立行政法人情報処理推進機構 財務部 契約グループ 担当：今木、岡野

TEL：03-5978-7502

E-mail：fa-bid-kt@ipa.go.jp

(注) 独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針(平成22年12月7日閣議決定)
に基づく契約に係る情報の公表について

独立行政法人が行う契約については、「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」(平成22年12月7日閣議決定)において、独立行政法人と一定の関係を有する法人と契約をする場合には、当該法人への再就職の状況、当該法人との間の取引等の状況について情報を公開するなどの取組を進めるとされているところです。

これに基づき、以下のとおり、当機構との関係に係る情報を当機構のウェブサイトで公表することとしますので、所要の情報の当方への提供及び情報の公表に同意の上で、応札若しくは応募又は契約の締結を行っていただくよう御理解と御協力をお願いいたします。

なお、案件への応札若しくは応募又は契約の締結をもって同意されたものとみなさせていただきますので、ご了承ください。

(1) 公表の対象となる契約先

次のいずれにも該当する契約先

- ① 当機構において役員を経験した者(役員経験者)が再就職していること又は課長相当職以上の職を経験した者(課長相当職以上経験者)が役員、顧問等として再就職していること
- ② 当機構との間の取引高が、総売上高又は事業収入の3分の1以上を占めていること
※ 予定価格が一定の金額を超えない契約や光熱水費の支出に係る契約等は対象外

(2) 公表する情報

上記に該当する契約先について、契約ごとに、物品役務等の名称及び数量、契約締結日、契約先の名称、契約金額等と併せ、次に掲げる情報を公表します。

- ① 当機構の役員経験者及び課長相当職以上経験者(当機構OB)の人数、職名及び当機構における最終職名
- ② 当機構との間の取引高
- ③ 総売上高又は事業収入に占める当機構との間の取引高の割合が、次の区分のいずれかに該当する旨
3分の1以上2分の1未満、2分の1以上3分の2未満又は3分の2以上
- ④ 一者応札又は一者応募である場合はその旨

(3) 当方に提供していただく情報

- ① 契約締結日時時点で在職している当機構OBに係る情報(人数、現在の職名及び当機構における最終職名等)
- ② 直近の事業年度における総売上高又は事業収入及び当機構との間の取引高

(4) 公表日

契約締結日の翌日から起算して原則として72日以内(4月に締結した契約については原則として93日以内)

(5) 実施時期

平成23年7月1日以降の一般競争入札・企画競争・公募公告に係る契約及び平成23年7月1日以降に契約を締結した随意契約について適用します。

なお、応札若しくは応募又は契約の締結を行ったにもかかわらず情報提供等の協力をいただけない相手方については、その名称等を公表させていただくことがあり得ますので、ご了承ください。

本業務に関する交付資料一覧

本業務に関して予め交付する資料は以下の通りである。
成果物の参考にすること。

- | | |
|--|------------------------------------|
| 1 個人学習用スライド(抜粋版) | : Microsoft PowerPoint 形式, ノート機能利用 |
| 2 個人学習用事前課題の
検討結果記入様式サンプル | : Microsoft Word 形式 |
| 3 理解度確認テスト (問題と解答例及び解説)
サンプル | : Microsoft Excel 形式 |
| 4 グループ討議当日の投影用スライド (抜粋版)
(認定講師に向けた指導要領含む) | : Microsoft PowerPoint 形式、ノート機能利用 |
| 5 グループ討議結果を記入する様式サンプル | : Microsoft Word 形式 |
| 6 グループ討議当日のタイムテーブルサンプル | : Microsoft Excel 形式 |
| 7 講習効果測定の設定問 (事前・事後) サンプル | : Microsoft Excel 形式 |
| 8 認定講師向け勉強会説明資料サンプル | : Microsoft PowerPoint 形式 |

以上

独立行政法人情報処理推進機構
理事長 齊藤 裕 殿

秘密保持誓約書

当社は、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に関する手続において、貴機構から貸与を許可された情報のうち、公知の情報以外（以下「秘密情報」という。）の取扱いに関しては、下記の事項を厳守することを、ここに誓約致します。

記

1. 秘密情報を本入札に係る役職員以外の者に対して開示又は漏洩致しません。
2. 秘密情報は本入札のためだけに利用致します。
3. 当社が秘密情報を外部に開示又は漏洩したことにより、貴機構が損害を被った場合には、損害賠償等について真摯に対応致します。

以上

(住所)
(会社名)
(代表者名)

印

Ⅱ. 契約書 (案)

2023 情財第 xx 号

契 約 書

独立行政法人情報処理推進機構（以下「甲」という。）と〇〇〇〇〇（以下「乙」という。）とは、次の条項により「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に関する請負契約を締結する。

（契約の目的）

- 第1条 甲は、別紙仕様書記載の「契約の目的」を実現するために、同仕様書及び提案書記載の「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」（以下、「請負業務」という。）の完遂を乙に注文し、乙は本契約及び関係法令の定めに従って誠実に請負業務を完遂することを請け負う。
- 2 乙は、本契約においては、請負業務またはその履行途中までの成果が可分であるか否かに拘わらず、請負業務が完遂されることによるのみ、甲が利益を受け、また甲の契約の目的が達成されることを、確認し了解する。

（再請負の制限）

- 第2条 乙は、請負業務の全部を第三者に請負わせてはならない。
- 2 乙は、請負業務の一部を第三者（以下「再請負先」という。）に請負わせようとするときは、事前に再請負先、再請負の対価、再請負作業内容その他甲所定の事項を、書面により甲に届け出なければならない。
- 3 前項に基づき、乙が請負業務の一部を再請負先に請負させた場合においても、甲は、再請負先の行為を全て乙の行為とみなし、乙に対し本契約上の責任を問うことができる。

（責任者の選任）

- 第3条 乙は、請負業務を実施するにあたって、責任者（乙の正規従業員に限る。）を選任して甲に届け出る。
- 2 責任者は、請負業務の進捗状況を常に把握するとともに、各進捗状況について甲の随時の照会に応じるとともに定期的または必要に応じてこれを甲に報告するものとする。
- 3 乙は、第1項により選任された責任者に変更がある場合は、直ちに甲に届け出る。

（納入物件及び納入期限）

第4条 納入物件、納入期限及びその他納入に関する事項については、別紙仕様書のとおりとする。

（契約金額）

第5条 甲が本契約の対価として乙に支払うべき契約金額は、金〇〇, 〇〇〇, 〇〇〇円（うち消費税及び地方消費税〇, 〇〇〇, 〇〇〇円）とする。なお、契約金額の内訳は、以下のとおりとする。

中間納入	金〇〇, 〇〇〇, 〇〇〇円 （うち消費税及び地方消費税〇, 〇〇〇, 〇〇〇円）
最終納入	金〇〇, 〇〇〇, 〇〇〇円 （うち消費税及び地方消費税〇, 〇〇〇, 〇〇〇円）

（権利義務の譲渡）

第6条 乙は、本契約によって生じる権利又は義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。

（実地調査）

- 第7条 甲は、必要があると認めるときは、乙に対し、自ら又はその指名する第三者をして、請負業務の実施状況等について、報告又は資料を求め、若しくは事業所に臨んで実地に調査を行うことができる。
- 2 前項において、甲は乙に意見を述べ、補足資料の提出を求めることができる。

（検査）

第8条 甲は、各納入物件の納入を受けた日から30日以内に、当該納入物件について別紙仕様書及び提案

書に基づき検査を行い、同仕様書及び提案書に定める基準に適合しない事実を発見したときは、当該事実の概要を書面によって遅滞なく乙に通知する。

- 2 各納入物件について、前項所定の期間内に同項所定の通知が無いときは、当該期間満了日をもって当該納入物件は同項所定の検査に合格したものとみなす。
- 3 中間納入物件が本条による検査に合格した場合、中間納入物件についての業務が終了したものとす。
- 4 請負業務は、最終納入物件が本条による検査に合格した日をもって完了とする。
- 5 第1項及び第2項の規定は、第1項所定の通知書に記載された指摘事実に対し、乙が適切な修正等を行い甲に再納入する場合に準用する。

(契約不適合責任)

- 第9条 甲は、中間納入物件の検査の合格又は請負業務完了の日から1年以内に納入物件その他請負業務の成果に種類、品質又は数量に関して仕様書及び提案書の記載内容に適合しない事実（以下「契約不適合」という。）を発見したときは、相当の催告期間を定めて、甲の承認または指定した方法により、その契約不適合の修補、代品との交換又は不足分の引渡しによる履行の追完を乙に請求することができる。但し、発見後合理的期間内に乙に通知することを条件とする。
- 2 前項において、乙は、前項所定の方法以外の方法による修補等を希望する場合、修補等に要する費用の多寡、甲の負担の軽重等に関わらず、甲の書面による事前の同意を得なければならない。この場合、甲は、事情の如何を問わず同意する義務を負わない。
 - 3 第1項において催告期間内に修補等がないときは、甲は、その選択に従い、本契約を解除し、またはその不適合の程度に応じて代金の減額を請求することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、第1項に関わらず、催告なしに直ちに解除し、または代金の減額を請求することができる。
 - 一 修補等が不能であるとき。
 - 二 乙が修補等を拒絶する意思を明確に表示したとき。
 - 三 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に修補等をしなければ契約の目的を達することができない場合において、乙が修補等をしないでその時期を経過したとき。
 - 四 前各号に掲げる場合のほか、甲が第1項所定の催告をしても修補等を受ける見込みがないことが明らかであるとき。
 - 4 第1項で定めた催告期間内に修補等がなされる見込みがないと合理的に認められる場合、甲は、前項本文に関わらず、催告期間の満了を待たずに本契約を解除することができる。
 - 5 前各項において、甲は、乙の責めに帰すべき事由による契約不適合によって甲が被った損害の賠償を、別途乙に請求することができる。
 - 6 本条は、本契約終了後においても有効に存続するものとする。

(対価の支払及び遅延利息)

- 第10条 甲は、中間納入物件の検査の合格又は請負業務の完了後、乙から適法な支払請求書を受領した日の属する月の翌月末日までに契約金額を支払う。なお、支払いに要する費用は甲の負担とする。
- 2 甲が前項の期日までに対価を支払わない場合は、その遅延期間における当該未払金額に対して、財務大臣が決定する率（政府契約の支払遅延に対する遅延利息の率（昭和24年12月12日大蔵省告示第991号））によって、遅延利息を支払うものとする。
 - 3 乙は、請負業務の履行途中までの成果に対しては、事由の如何を問わず、何らの支払いもなされないことを確認し了解する。

(遅延損害金)

- 第11条 天災地変その他乙の責に帰すことができない事由による場合を除き、乙が各納入期限までに納入物件の納入が終らないときは、甲は遅延損害金として、延滞日数1日につき契約金額の1,000分の1に相当する額を徴収することができる。
- 2 前項の規定は、納入遅延となった後に本契約が解除された場合であっても、解除の日までの日数に対して適用するものとする。

(契約の変更)

- 第12条 甲及び乙は、本契約の締結後、次の各号に掲げる事由が生じた場合は、甲乙合意のうえ本契約を変更することができる。
- 一 仕様書及び提案書その他契約条件の変更（乙に帰責事由ある場合を除く。）。)

- 二 天災地変、著しい経済情勢の変動、不可抗力その他やむを得ない事由に基づく諸条件の変更。
 - 三 税法その他法令の制定又は改廃。
 - 四 価格に影響のある技術変更提案の実施。
- 2 前項による本契約の変更は、納入物件、納期、契約金額その他すべての契約内容の変更の有無・内容等についての合意の成立と同時に効力を生じる。なお、本契約の各条項のうち変更の合意がない部分は、本契約の規定内容が引き続き有効に適用される。

(契約の解除等)

- 第13条 甲は、第9条による場合の他、次の各号の一に該当するときは、催告の上、本契約の全部又は一部を解除することができる。但し、第4号乃至第6号の場合は催告を要しない。
- 一 乙が本契約条項に違反したとき。
 - 二 乙が天災地変その他不可抗力の原因によらないで、各納入期限までに本契約の全部又は一部を履行しないか、又は納入期限までの納入が見込めないとき。
 - 三 乙が甲の指示に従わないとき、その職務執行を妨げたとき、又は談合その他不正な行為があったとき。
 - 四 乙が破産手続開始の決定を受け、その他法的整理手続が開始したこと、資産及び信用の状態が著しく低下したと認められること等により、契約の円滑な履行が困難と認められるとき。
 - 五 天災地変その他乙の責に帰すことができない事由により、各納入物件を納入する見込みがないと認められるとき。
 - 六 乙が、甲が正当な理由と認める理由により、本契約の解除を申し出たとき。
- 2 乙は、甲がその責に帰すべき事由により、本契約上の義務に違反した場合は、相当の期間を定めて、その履行を書面で催告し、その期間内に履行がないときは、本契約を解除することができる。
- 3 乙の本契約違反の程度が著しく、または乙に重大な背信的言動があった場合、甲は第1項にかかわらず、催告せずに直ちに本契約を解除することができる。
- 4 甲は、第1項第1号乃至第4号又は前項の規定により本契約を解除する場合は、違約金として契約金額の100分の10に相当する金額（その金額に100円未満の端数があるときはその端数を切り捨てる。）を乙に請求することができる。
- 5 前項の規定は、甲に生じた実際の損害額が同項所定の違約金の額を超える場合において、甲がその超える部分について乙に対し次条に規定する損害賠償を請求することを妨げない。

(損害賠償)

- 第14条 乙は、乙の責に帰すべき事由によって甲又は第三者に損害を与えたときは、その被った損害を賠償するものとする。ただし、乙の負う賠償額は、乙に故意又は重大な過失がある場合を除き、第5条所定の契約金額を超えないものとする。
- 2 第11条所定の遅延損害金の有無は、前項に基づく賠償額に影響を与えないものとする。

(違約金及び損害賠償金の遅延利息)

- 第15条 乙が、第13条第4項の違約金及び前条の損害賠償金を甲が指定する期間内に支払わないときは、乙は、当該期間を経過した日から支払をする日までの日数に応じ、年3パーセントの割合で計算した金額の遅延利息を支払わなければならない。

(秘密保持及び個人情報)

- 第16条 甲及び乙は、相互に本契約の履行過程において知り得た相手方の秘密を他に漏洩せず、また本契約の履行に必要な範囲を超えて利用しない。ただし、甲が、法令等、官公署の要求、その他公益的見地に基づいて、必要最小限の範囲で開示する場合を除く。
- 2 乙は、契約締結後速やかに、情報セキュリティを確保するための体制を定めたものを含み、以下に記載する事項の遵守の方法及び提出を求める情報、書類等（以下「情報セキュリティを確保するための体制等」という。）について、甲に提示し了承を得た上で確認書類として提出すること。ただし、別途契約締結前に、情報セキュリティを確保するための体制等について甲に提示し了承を得た上で提出したときは、この限りでない。また、契約期間中に、甲の要請により、情報セキュリティを確保するための体制及び対策に係る実施状況を紙媒体又は電子媒体により報告すること。加えて、これらに変更が生じる場合は、事前に甲へ案を提出し、同意を得ること。なお、報告の内容について、甲と乙が協議し不十分であると認めた場合、乙は、速やかに甲と協議し対策を講ずること。

- 3 乙は、本契約遂行中に得た本契約に関する情報（紙媒体及び電子媒体）について、甲の許可なく当機構外で複製してはならない。また、作業終了後には、複製した情報が電子計算機等から消去されていることを甲が確認できる方法で証明すること。
- 4 乙は、本契約を終了又は契約解除する場合には、乙において本契約遂行中に得た本契約に関する情報（紙媒体及び電子媒体であってこれらの複製を含む。）を速やかに甲に返却又は廃棄若しくは消去すること。その際、甲の確認を必ず受けること。
- 5 乙は、契約期間中及び契約終了後においても、本契約に関して知り得た当機構の業務上の内容について、他に漏らし又は他の目的に利用してはならない。ただし、甲の承認を得た場合は、この限りではない。
- 6 乙は、本契約の遂行において、情報セキュリティが侵害され又はそのおそれがある場合の対処方法について甲に提示すること。また、情報セキュリティが侵害され又はそのおそれがあることを認知した場合には、速やかに甲に報告を行い、原因究明及びその対処等について甲と協議の上、その指示に従うこと。
- 7 乙は、本契約全体における情報セキュリティの確保のため、「政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準」等に基づく、情報セキュリティ対策を講じなければならない。
- 8 乙は、当機構が実施する情報セキュリティ監査又はシステム監査を受け入れるとともに、指摘事項への対応を行うこと。
- 9 乙は、本契約に従事する者を限定すること。また、乙の資本関係・役員の情報、本契約の実施場所、本契約の全ての従事者の所属、専門性（情報セキュリティに係る資格・研修実績等）、実績及び国籍に関する情報を甲に提示すること。なお、本契約の実施期間中に従事者を変更等する場合は、事前にこれらの情報を甲に再提示すること。
- 10 個人情報に関する取扱いについては、別添1「個人情報の取扱いに関する特則」のとおりとする。
- 11 本条は、本契約終了後も有効に存続する。

（知的財産権）

- 第17条 請負業務の履行過程で生じた著作権（著作権法第27条及び第28条に定める権利を含む。）、発明（考案及び意匠の創作を含む。）及びノウハウを含む産業財産権（特許その他産業財産権を受ける権利を含む。）（以下「知的財産権」という。）は、乙又は国内外の第三者が従前から保有していた知的財産権を除き、第8条第3項の規定による請負業務完了の日をもって、乙から甲に自動的に移転するものとする。なお、乙は、甲の要請がある場合、登録その他の手続きに協力するものとする。
- 2 乙は、請負業務の成果に乙が従前から保有する知的財産権が含まれている場合は、前項に規定する移転の時に、甲に対して非独占的な実施権、使用権、第三者に対する利用許諾権（再利用許諾権を含む。）、その他一切の利用を許諾したものとみなし、第三者が従前から保有する知的財産権が含まれている場合は、同旨の法的効果を生ずべき適切な法的措置を、当該第三者との間で事前に講じておくものとする。なお、これに要する費用は契約金額に含まれるものとする。
 - 3 乙は、甲及び甲の許諾を受けた第三者に対し、請負業務の成果についての著作者人格権、及び著作権法第28条の権利その他“原作品の著作者／権利者”の地位に基づく権利主張は行わないものとする。

（知的財産権の紛争解決）

- 第18条 乙は、請負業務の成果が、甲及び国内外の第三者が保有する知的財産権（公告、公開中のものを含む。）を侵害しないことを保証するとともに、侵害の恐れがある場合、又は甲からその恐れがある旨の通知を受けた場合には、当該知的財産権に関し、甲の要求する事項及びその他の必要な事項について遅滞なく調査を行い、これを速やかに甲に書面で報告しなければならない。
- 2 乙は、知的財産権に関して甲を当事者または関係者とする紛争が生じた場合（私的交渉、仲裁を含み、法的訴訟に限らない。）、その費用と責任において、その紛争を処理解決するものとし、甲に対し一切の負担及び損害を被らせないものとする。
 - 3 第9条の規定は、知的財産権に関する紛争には適用しない。また、本条は、本契約終了後も有効に存続する。

（成果の公表等）

- 第19条 甲は、請負業務完了の日以後、請負業務の成果を公表、公開及び出版（以下「公表等」という。）することができる。
- 2 甲は、乙の承認を得て、請負業務完了前に、予定される成果の公表等を行うことができる。
 - 3 乙は、成果普及等のために甲が成果報告書等を作成する場合には、甲に協力する。

- 4 乙は、甲の書面による事前の承認を得た場合は、その承認の範囲内で請負業務の成果を公表等することができる。この場合、乙はその具体的方法、時期、権利関係等について事前に甲と協議してその了解を得なければならない。なお、甲の要請がある場合は、甲と共同して行う。
- 5 乙は、前項に従って公表等しようとする場合には、著作権表示その他法が定める権利表示と共に「独立行政法人情報処理推進機構が実施する事業の成果」である旨を、容易に視認できる場所と態様で表示しなければならない。
- 6 本条の規定は、本契約終了後も有効に存続する。

(協議)

第20条 本契約の解釈又は本契約に定めのない事項について生じた疑義については、甲乙協議し、誠意をもって解決する。

(その他)

第21条 本契約に関する訴えの第一審は、甲の所在地を管轄する地方裁判所の管轄に専属する。

特記事項

(談合等の不正行為による契約の解除)

第1条 甲は、次の各号のいずれかに該当したときは、契約を解除することができる。

- 一 本契約に関し、乙が私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「独占禁止法」という。）第3条又は第8条第1号の規定に違反する行為を行ったことにより、次のイからハまでのいずれかに該当することとなったとき
 - イ 独占禁止法第61条第1項に規定する排除措置命令が確定したとき
 - ロ 独占禁止法第62条第1項に規定する課徴金納付命令が確定したとき
 - ハ 独占禁止法第7条の4第7項又は第7条の7第3項の課徴金納付命令を命じない旨の通知があったとき
- 二 本契約に関し、乙の独占禁止法第89条第1項又は第95条第1項第1号に規定する刑が確定したとき
- 三 本契約に関し、乙（法人の場合にあっては、その役員又は使用人を含む。）の刑法（明治40年法律第45号）第96条の6又は第198条に規定する刑が確定したとき

(談合等の不正行為に係る通知文書の写しの提出)

第2条 乙は、前条第1号イからハまでのいずれかに該当することとなったときは、速やかに、次の各号の文書のいずれかの写しを甲に提出しなければならない。

- 一 独占禁止法第61条第1項の排除措置命令書
- 二 独占禁止法第62条第1項の課徴金納付命令書
- 三 独占禁止法第7条の4第7項又は第7条の7第3項の課徴金納付命令を命じない旨の通知文書

(談合等の不正行為による損害の賠償)

第3条 乙が、本契約に関し、第1条の各号のいずれかに該当したときは、甲が本契約を解除するか否かにかかわらず、かつ、甲が損害の発生及び損害額を立証することを要することなく、乙は、契約金額（本契約締結後、契約金額の変更があった場合には、変更後の契約金額）の100分の10に相当する金額（その金額に100円未満の端数があるときは、その端数を切り捨てた金額）を違約金として甲の指定する期間内に支払わなければならない。

- 2 前項の規定は、本契約による履行が完了した後も適用するものとする。
- 3 第1項に規定する場合において、乙が事業者団体であり、既に解散しているときは、甲は、乙の代表者であった者又は構成員であった者に違約金の支払を請求することができる。この場合において、乙の代表者であった者及び構成員であった者は、連帯して支払わなければならない。
- 4 第1項の規定は、甲に生じた実際の損害額が同項に規定する違約金の金額を超える場合において、甲がその超える分について乙に対し損害賠償金を請求することを妨げるものではない。
- 5 乙が、第1項の違約金及び前項の損害賠償金を甲が指定する期間内に支払わないときは、乙は、当該期間を経過した日から支払をする日までの日数に応じ、年3パーセントの割合で計算した金額の遅延利息

を甲に支払わなければならない。

(暴力団関与の属性要件に基づく契約解除)

第4条 甲は、乙が次の各号の一に該当すると認められるときは、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

- 一 法人等（個人、法人又は団体をいう。）が、暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。）であるとき又は法人等の役員等（個人である場合はその者、法人である場合は役員又は支店若しくは営業所（常時契約を締結する事務所をいう。）の代表者、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。以下同じ。）が、暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるとき
- 二 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき
- 三 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき
- 四 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれと社会的に非難されるべき関係を有しているとき

(再請負契約等に関する契約解除)

第5条 乙は、本契約に関する再請負先等（再請負先（下請が数次にわたるときは、すべての再請負先を含む。）並びに自己、再請負先が当該契約に関連して第三者と何らかの個別契約を締結する場合の当該第三者をいう。以下同じ。）が解除対象者（前条に規定する要件に該当する者をいう。以下同じ。）であることが判明したときは、直ちに当該再請負先等との契約を解除し、又は再請負先等に対し解除対象者との契約を解除させるようにしなければならない。

2 甲は、乙が再請負先等が解除対象者であることを知りながら契約し、若しくは再請負先等の契約を承認したとき、又は正当な理由がないのに前項の規定に反して当該再請負先等との契約を解除せず、若しくは再請負先等に対し契約を解除させるための措置を講じないときは、本契約を解除することができる。

(損害賠償)

第6条 甲は、第4条又は前条第2項の規定により本契約を解除した場合は、これにより乙に生じた損害について、何ら賠償ないし補償することは要しない。

2 乙は、甲が第4条又は前条第2項の規定により本契約を解除した場合において、甲に損害が生じたときは、その損害を賠償するものとする。

3 乙が、本契約に関し、第4条又は前条第2項の規定に該当したときは、甲が本契約を解除するか否かにかかわらず、かつ、甲が損害の発生及び損害額を立証することを要することなく、乙は、契約金額（本契約締結後、契約金額の変更があった場合には、変更後の契約金額）の100分の10に相当する金額（その金額に100円未満の端数があるときは、その端数を切り捨てた金額）を違約金として甲の指定する期間内に支払わなければならない。

4 前項の規定は、本契約による履行が完了した後も適用するものとする。

5 第2項に規定する場合において、乙が事業者団体であり、既に解散しているときは、甲は、乙の代表者であった者又は構成員であった者に違約金の支払を請求することができる。この場合において、乙の代表者であった者及び構成員であった者は、連帯して支払わなければならない。

6 第3項の規定は、甲に生じた実際の損害額が同項に規定する違約金の金額を超える場合において、甲がその超える分について乙に対し損害賠償金を請求することを妨げるものではない。

7 乙が、第3項の違約金及び前項の損害賠償金を甲が指定する期間内に支払わないときは、乙は、当該期間を経過した日から支払をする日までの日数に応じ、年3パーセントの割合で計算した金額の遅延利息を甲に支払わなければならない。

(不当介入に関する通報・報告)

第7条 乙は、本契約に関して、自ら又は再請負先等が、暴力団、暴力団員、暴力団関係者等の反社会的勢力から不当要求又は業務妨害等の不当介入（以下「不当介入」という。）を受けた場合は、これを拒否し、又は再請負先等をして、これを拒否させるとともに、速やかに不当介入の事実を甲に報告するとともに警察への通報及び捜査上必要な協力を行うものとする。

本契約の締結を証するため、本契約書 2 通を作成し、双方記名押印の上、甲、乙それぞれ 1 通を保有する。

20〇〇年〇月〇日

甲 東京都文京区本駒込二丁目 28 番 8 号
独立行政法人情報処理推進機構
理事長 齊藤 裕

乙 〇〇県〇〇市〇〇町〇丁目〇番〇〇号
株式会社〇〇〇〇〇〇〇〇
代表取締役 〇〇 〇〇

個人情報の取扱いに関する特則

(定義)

第 1 条 本特則において、「個人情報」とは、業務に関する情報のうち、個人に関する情報であって、当該情報に含まれる記述、個人別に付された番号、記号その他の符号又は画像もしくは音声により当該個人を識別することのできるもの（当該情報のみでは識別できないが、他の情報と容易に照合することができ、それにより当該個人を識別できるものを含む。）をいい、秘密であるか否かを問わない。以下各条において、「当該個人」を「情報主体」という。

(責任者の選任)

第 2 条 乙は、個人情報を取扱う場合において、個人情報の責任者を選任して甲に届け出る。
2 乙は、第 1 項により選任された責任者に変更がある場合は、直ちに甲に届け出る。

(個人情報の収集)

第 3 条 乙は、業務遂行のため自ら個人情報を収集するときは、「個人情報の保護に関する法律」その他の法令に従い、適切且つ公正な手段により収集するものとする。

(開示・提供の禁止)

第 4 条 乙は、個人情報の開示・提供の防止に必要な措置を講じるとともに、甲の事前の書面による承諾なしに、第三者（情報主体を含む）に開示又は提供してはならない。ただし、法令又は強制力ある官署の命令に従う場合を除く。
2 乙は、業務に従事する従業員以外の者に、個人情報を取り扱わせてはならない。
3 乙は、業務に従事する従業員のうち個人情報を取り扱う従業員に対し、その在職中及びその退職後においても個人情報を他人に開示・提供しない旨の誓約書を提出させるとともに、随時の研修・注意喚起等を実施してこれを厳正に遵守させるものとする。

(目的外使用の禁止)

第 5 条 乙は、個人情報を業務遂行以外のいかなる目的にも使用してはならない。

(複写等の制限)

第 6 条 乙は、甲の事前の書面による承諾を得ることなしに、個人情報を複写又は複製してはならない。ただし、業務遂行上必要最小限の範囲で行う複写又は複製については、この限りではない。

(個人情報の管理)

第 7 条 乙は、個人情報を取り扱うにあたり、本特則第 4 条所定の防止措置に加えて、個人情報に対する不正アクセスまたは個人情報の紛失、破壊、改ざん、漏えい等のリスクに対し、合理的な安全対策を講じなければならない。
2 乙は、前項に従って講じた措置を、遅滞なく甲に書面で報告するものとする。これを変更した場合も同様とする。
3 甲は、乙に事前に通知の上乙の事業所に立入り、乙における個人情報の管理状況を調査することができる。
4 前三項に関して甲が別途に管理方法を指示するときは、乙は、これに従わなければならない。
5 乙は、業務に関して保管する個人情報（甲から預託を受け、或いは乙自ら収集したものを含む）について甲から開示・提供を求められ、訂正・追加・削除を求められ、或いは業務への利用の停止を求められた場合、直ちに且つ無償で、これに従わなければならない。

(返還等)

第 8 条 乙は、甲から要請があったとき、又は業務が終了（本契約解除の場合を含む）したときは、個人情報が含まれるすべての物件（これを複写、複製したものを含む。）を直ちに甲に返還し、又は引き渡すとともに、乙のコンピュータ等に登録された個人情報のデータを消去して復元不可能な状態とし、その旨を甲に報告しなければならない。ただし、甲から別途に指示があるときは、これに従うものとする。
2 乙は、甲の指示により個人情報が含まれる物件を廃棄するときは、個人情報が判別できないよう必要な

処置を施した上で廃棄しなければならない。

(記録)

第9条 乙は、個人情報の受領、管理、使用、訂正、追加、削除、開示、提供、複製、返還、消去及び廃棄についての記録を作成し、甲から要求があった場合は、当該記録を提出し、必要な報告を行うものとする。

2 乙は、前項の記録を業務の終了後5年間保存しなければならない。

(再請負)

第10条 乙が甲の承諾を得て業務を第三者に再請負する場合は、十分な個人情報の保護水準を満たす再請負先を選定するとともに、当該再請負先との間で個人情報保護の観点から見て本特則と同等以上の内容の契約を締結しなければならない。この場合、乙は、甲から要求を受けたときは、当該契約書面の写しを甲に提出しなければならない。

2 前項の場合といえども、再請負先の行為を乙の行為とみなし、乙は、本特則に基づき乙が負担する義務を免れない。

(事故)

第11条 乙において個人情報に対する不正アクセスまたは個人情報の紛失、破壊、改ざん、漏えい等の事故が発生したときは、当該事故の発生原因の如何にかかわらず、乙は、ただちにその旨を甲に報告し、甲の指示に従って、当該事故の拡大防止や收拾・解決のために直ちに応急措置を講じるものとする。なお、当該措置を講じた後ただちに当該事故及び応急措置の報告並びに事故再発防止策を書面により甲に提示しなければならない。

2 前項の事故が乙の本特則の違反に起因する場合において、甲が情報主体又は甲の顧客等から損害賠償請求その他の請求を受けたときは、甲は、乙に対し、その解決のために要した費用（弁護士費用を含むがこれに限定されない）を求償することができる。なお、当該求償権の行使は、甲の乙に対する損害賠償請求権の行使を妨げるものではない。

3 第1項の事故が乙の本特則の違反に起因する場合は、本契約が解除される場合を除き、乙は、前二項のほか、当該事故の善後策として必要な措置について、甲の別途の指示に従うものとする。

以上

Ⅲ. 仕様書

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」

事業内容（仕様書）

独立行政法人 **情報処理推進機構**

事業内容（仕様書）

1. 件名

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」

2. 背景・目的

2016年4月、サイバーセキュリティ基本法及び情報処理の促進に関する法律（以下「情促法」という。）の一部を改正する法律成立（同年10月施行）に伴い、新たに「情報処理安全確保支援士」に関する制度が創設された。情促法第26条において、情報処理安全確保支援士（通称：「登録セキスペ」。以下「登録セキスペ」という。）は情報処理推進機構（以下「IPA」という。）の行うサイバーセキュリティに関する講習又はこれと同等以上の効果を有すると認められる講習として経済産業省令で定めるものを受けなければならないと規定されており、IPAが行うサイバーセキュリティに関する講習事務はIPAが実施している。

本業務は、IPAが行うサイバーセキュリティに関する講習のうち、実践講習の追加開発を行うものである。

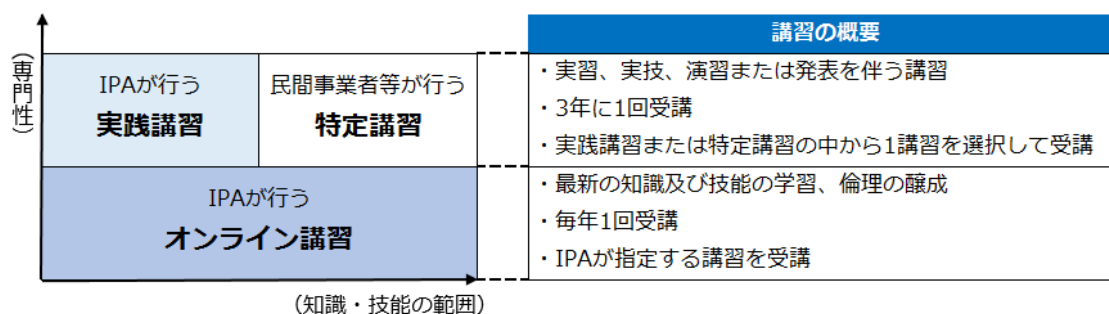
3. 登録セキスペの講習概要

3.1 登録セキスペの講習全体概要

登録セキスペに受講が義務付けられている講習には、毎年受講する「オンライン講習」と、3年に1回受講する「実践講習または特定講習」の2種類がある。

詳細はIPAウェブサイト「講習の目的と概要」¹を参照すること。

【講習の全体像】



3.2 IPAが行う実践講習について

「3.1 登録セキスペの講習全体概要」に示す講習のうち、現在開講しているIPAが行う実践講習は、下表のとおりである。

講習名	受講推奨対象	講習の概要
実践講習 A	登録セキスペ 登録後の方	インシデント対応などのグループ演習を通じ、登録セキスペとして求められる情報セキュリティ実践のための具体的な技術や手法を習得する
実践講習 B	登録後更新回数 1回の方	新規事業を立ち上げる際のセキュリティ上の助言をグループで検討するという演習を通じ、業務で利用するための実践的な能力を習得する
業界別サイバーレジリエンス強化演習 (CyberREX)	特になし	企業などの部門責任者層が、業界別の仮想企業におけるシナリオによる演習を通じ、サイバーリスクへの対応力・回復力の強化について学ぶ
制御システム向けサイバーセキュリティ演習 (CyberSTIX)	特になし	企業等の制御システムに関わる実務者が、模擬システムにおけるサイバー攻撃や防御の演習を通じ、制御システムのセキュリティについてより深く実践的に学ぶ

¹ IPA ウェブサイト「講習の目的と概要」:

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/riss/forriss/koushu/overview.html>

3.3 実践講習 A 及び実践講習 B について

現在開講している実践講習 A 及び実践講習 B の概要は下記の通りである。また、実践講習 A 及び実践講習 B は、第三者による有識者委員会にて認定された講師（以下「認定講師」という。）が担当している。

詳細は IPA ウェブサイト「IPA が行う実践講習」²及び「情報処理安全確保支援士 実践講習 A、B の講師紹介」³を参照すること。

①実践講習 A

実施形態	<ul style="list-style-type: none"> Web 会議システムを用いたグループ討議 グループ討議参加のための準備の位置づけ：eラーニング形式の個人学習
コース概要	<ol style="list-style-type: none"> 個人学習（eラーニング形式）《標準学習時間：2 時間》 知識 (1) インシデント対応手法 (2) 情報セキュリティにおける倫理 グループ討議（Web 会議システムを用いたリモート形式） 《10：00～17:00（休憩時間含む）》 技能 (1) 【ケーススタディ(1)】 インシデント対応 (2) 【ケーススタディ(2)】 予防策の検討 倫理 (1) 【ケーススタディ(3)】 倫理的な判断・行動に関するケース
修了基準	<ul style="list-style-type: none"> 「1. 個人学習（eラーニング形式）」の受講完了後、「2. グループ討議」の全てのカリキュラムを、本人が受講すること 「2. グループ討議」のディスカッションに積極的に参加すること 「2. グループ討議」の受講当日中に、アンケート等を提出すること

②実践講習 B

実施形態	<ul style="list-style-type: none"> Web 会議システムを用いたグループ討議 グループ討議参加のための準備の位置づけ：eラーニング形式の個人学習
コース概要	<ol style="list-style-type: none"> 個人学習（eラーニング形式）《標準学習時間：3 時間》 知識 (1) 個人情報の保護 (2) DX with Cybersecurity (3) インシデントに備える その他 ・リモート講習（グループ討議）の進め方 ・リモート講習（グループ討議）に向けた課題 （想定企業の説明、グループ討議の準備） グループ討議（Web 会議システムを用いたリモート形式） 《10：00～18:00（休憩時間含む）》 技能 (1) 【ケーススタディ 課題 1】 デジタル変革企画への対応 (2) 【ケーススタディ 課題 2】 インシデントに備える (3) 振り返り
修了基準	<ul style="list-style-type: none"> 「1. 個人学習（eラーニング形式）」の受講完了後、「2. グループ討議」の全てのカリキュラムを、本人が受講すること 「2. グループ討議」のディスカッションに積極的に参加すること 「2. グループ討議」の受講当日中に、アンケート等を提出すること

² IPA ウェブサイト「IPA が行う実践講習」:

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/riss/forriss/koushu/jissen.html>

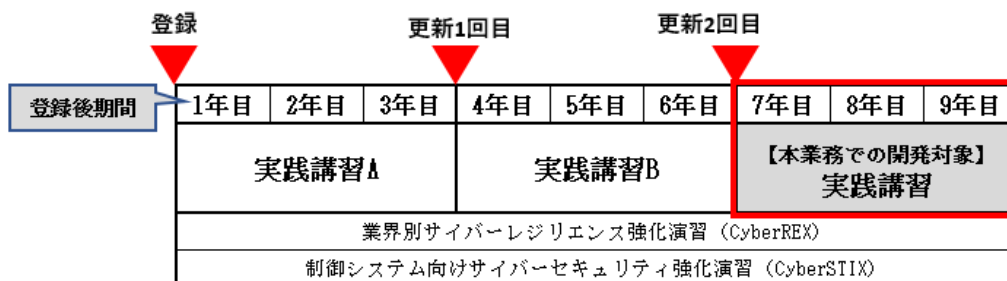
³ IPA ウェブサイト「情報処理安全確保支援士 実践講習 A、B の講師紹介」:

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/riss/forriss/koushu/jissen-koushi.html>

4. 本業務の内容

4.1 業務概要

本業務の開発対象は、登録更新回数 2 回の登録セキスペを受講推奨対象とする実践講習の教材等一式である。教材一式等には、認定講師用の指導要領や講習を円滑に進めるために必要なガイドも含む。詳細は、「4.2 作業内容」および「7.2 納入物件」を参照のこと。



4.2 作業内容

①別添 2 「実践講習コース概要」に基づき、以下を作成すること。詳細は、下表参照のこと。

- ・個人学習用関連教材 : No. 1～3
- ・グループ討議当日用関連教材 : No. 4～7
- ・認定講師向け勉強会資料 : No. 8
- ・その他、講習の質の担保に必要なと思われるもの : No. 9

No.	名称	説明	備考
【個人学習用関連教材】			
1	個人学習用 スライド	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ討議の事前準備として、受講者が e-ラーニング形式で受講する学習用スライド。受講者がグループ討議時に必要な知識を事前に学習することで、グループ討議の活性化を図る。 ・内容は、別添 2 「実践講習コース概要」に示す「知識」に関するものとする。 ・必要に応じて、事前課題を設定することも可とする。 ・Microsoft PowerPoint 形式で作成する。 ・Microsoft PowerPoint のノート機能を利用し、スライドの内容の補足説明を記載する。 	標準学習時間 2 時間程度とする。 《参考》 現行実践講習でのスライド数 ・実践講習 A : 43 ・実践講習 B : 44
2	個人学習用事前課題の検討結果記入様式	<ul style="list-style-type: none"> ・1. において、事前課題を設定する場合の事前課題の検討結果を記入する様式。必要に応じて作成する ・作成する場合は、Microsoft Word 形式で作成する。 	
3	理解度確認テスト (問題と解答例及び解説)	<ul style="list-style-type: none"> ・個人学習の理解度を確保するためのテスト問題、解答例及び解説。 ・問題は全 20 問とする。 ・Microsoft Excel 形式で作成する。 	

No.	名称	説明	備考
【グループ討議当日用 関連教材】			
4	グループ討議当日の 投影用スライド	<ul style="list-style-type: none"> Web 会議システムを用いたリモート形式で実施するグループ討議の当日に使用するスライド。 内容は、別添2「実践講習コース概要」に示す「技能」に関するものとする。 受講者の理解を深めるために必要と思われる内容や、講習を円滑に進めるために必要と思われる内容を含むこと。 例) ケーススタディの説明、討議の課題、討議に関連する内容の補足説明、討議の進め方の説明、解答例及び解説、進行を円滑に進めるために必要な説明（(演習グループ分け、成果物作成方法、発表方法等） 他 Microsoft PowerPoint 形式で作成する。 グループ討議の品質を確保のため、Microsoft PowerPoint のノート機能を利用し、認定講師に向けた指導要領として、各スライドで説明すべき事項、注意点等を記載すること。 	<p>1 日で実施可能なものとする。</p> <p>《参考》 現行実践講習でのスライド数⁴</p> <ul style="list-style-type: none"> 実践講習 A : 78 実践講習 B : 122
5	グループ討議結果を 記入する様式	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、グループ討議結果を記入する様式を作成すること。 作成する場合は、Microsoft Word 形式で作成する。 	
6	グループ討議当日の タイムテーブル	<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の講習タイムテーブル。 Microsoft Excel 形式で作成する。 	
7	講習効果測定の設定 (事前・事後)	<ul style="list-style-type: none"> 当該講習の効果を測定・判定するための設問。 グループ討議参加前に回答する設問と、参加後に回答する設問の2種類とし、グループ討議参加前後での差異を把握できるものとする。なお、設問はそれぞれ、3～5問とする。 Microsoft Excel 形式で作成する。 	
【認定講師向け勉強会資料】			
8	認定講師向け勉強会 説明資料	<ul style="list-style-type: none"> 本講習開講前に開催する認定講師向け勉強会説明資料。 認定講師が、本講習のねらい、講習の構成、登壇時の注意点等を認識し、質の高い講習開催を目的とするもの。 Microsoft Word、Excel、PowerPoint 形式のうち、使い勝手のよいもので作成する。 	<p>《参考》 現行実践講習に関する勉強会資料スライド数</p> <ul style="list-style-type: none"> 実践講習 A : 17 実践講習 B : 15
【その他、講習の質の担保に必要なと思われるもの】			
9	講習の質の確保に 必要な資料等	<ul style="list-style-type: none"> 上記1～8の他、当該講習実施の際に、講習の質の確保をするために、必要と考えられるものがあれば、適宜 IPA と協議の上、作成する。 Microsoft Word、Excel、PowerPoint 形式のうち、使い勝手のよいもので作成する。 	

⁴ オリエンテーション、グループ討議中に使用するツール使用方法の説明等、内容や討議の進め方に関連しないスライドは除く。

- ②上記①の作成にあたっては、次の事項に留意すること。
- a) 実践講習の総時間数(個人学習及びグループ討議当日の総時間数)は6時間以上とすること。グループ討議当日の講習は1日で実施可能なものとすること。また、半分以上の内容を実習、実技、演習又は発表その他実践的な方法により行うこと。
 - b) グループ討議は事前の個人学習の習得度を確認する場であるとともに、同等レベルの高度なスキル保有者同士での相互研鑽の場として活性化するような手法とすること。
 - c) ITスキル標準⁵レベル4相当の内容を基本とすること。
 - d) 教材が採り上げる情報セキュリティに係る業務の範囲は、現場での実際の業務において役に立つよう、情報セキュリティの企画、設計、開発、運用等、登録セキスペが従事する領域から選択すること。また、登録セキスペとして参照すべき基準やガイドラインに準拠すること。
(例:インシデント対応のプロセスや内容を取り扱う場合、「サイバー攻撃被害情報の共有と公表のあり方について」⁶~JPCERT/CC等)
 - e) 教材で採り上げる事例・ケーススタディは、可能な限り最新事例を参考にして作成すること。
 - f) 「倫理」に関する内容を含める場合は、「情報処理安全確保支援士 倫理綱領」⁷をベースとすること。また、必要に応じて、情報処理学会、日本技術士会、日本セキュリティ監査協会、日本システム監査人協会及び公認会計士協会等の倫理規定を参照すること。
 - g) 受講者が、予習・復習の際や、現場での実際の業務においても活用できるように、一般に公開されている資料(別添3「参照資料等」を参照のこと)を原則使用して内容を作成すること。別添3「参照資料等」以外にも、適切な公開資料があれば、IPAに事前に相談の上使用すること。
 - h) 教材は毎年更新する予定である(事例・ケーススタディの最新事例反映、誤りの修正、参照先リンクの修正等)。定期的な内容の見直し、更新に負担がかからないようにすること。
 - i) 具体的に記述する内容や様式については、IPAと協議して決定すること。
 - j) IPAに提出する資料等は、納品時も含め、請負者によるレビューを実施し、品質を確保したものを提出すること。
 - k) 作成物については、IPA及びIPAが指定する外部有識者委員会のレビューを実施する。レビュー実施後は、速やかに指摘事項の対応を行うこと。なお、外部有識者委員会のレビューのタイミング概略は、「4.3 作業計画の作成」を参照のこと。
- ③上記②の対応を行ったものを中間納入すること。
- ④上記①8の認定講師向け勉強会説明資料を用いた講師勉強会を2回開催し、説明を行うこと。なお、講師勉強会開催のタイミング概略は、「4.3 作業計画の作成」を参照のこと。勉強会の詳細は、IPAと協議の上決定する。
- ⑤「5.事業の実施体制」の⑧に示す任意要件を満たす場合には、当該認定講師にて、上記①4のグループ討議当日の投影用スライド等を用いて、グループ討議の試行開催を3回行うこと。
「5.事業の実施体制」の⑧に示す任意要件を満たさない場合は、グループ討議の試行開催3回の対応についての提案を行い、IPAと協議の上、決定すること。
試行開催の詳細は、IPAと協議の上決定する。なお、試行開催に関する設備、費用は、IPAにて対応する。
- ⑥上記④~⑤の実施を受けて判明した改善点の対応を行い、②j)に基づき品質を確保したものを最終納入すること。

4.3 作業計画の作成

契約締結後10営業日以内に本業務に関する作業計画及び「5.事業の実施体制」をIPAに提出すること。内容についてはIPAと協議の上確定する。

作業計画の策定にあたっては、次に示す本事業のマイルストーンを考慮すること。

⁵ ITスキル標準とは -ものさしとしてのスキル標準

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/skill-standard/plus-it-ui/itss/itss2.html>

⁶ サイバー攻撃被害情報の共有と公表のあり方について

https://www.soumu.go.jp/main_content/000762951.pdf

⁷ 情報処理安全確保支援士 倫理綱領

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/riss/forriss/rinri-youkou.html>

2024年4月上旬	発注・契約
4月中旬	キックオフ
5月頃	第1回 外部有識者委員会によるレビュー会 実施(中間レビュー) 企画(講習構成、課題シナリオ内容概略、タイムテーブル概略、指導要領の作成方針(サンプル等)、開発スケジュール等)の承認
12月頃	第2回 外部有識者委員会によるレビュー会 実施(全体レビュー) 4.2① No.1~7の承認
2025年2月中旬	第3回 外部有識者委員会によるレビュー会 実施(最終レビュー) 開催開始までのプロセス(講師勉強会、試行開催等)及び 4.2① No.8~9の承認
2月28日	中間納入(7.2参照)
3月頃	講師勉強会開催(2回)
3月~4月頃	グループ討議の試行開催(3回)
5月30日	最終納入(7.2参照)

4.4 作業実施上の留意事項

- ①開発物は、日本語で作成し誤記・誤植を含まず、わかりやすい表現とする。また、図表を用い、理解しやすいよう配慮の上、体系的に整理された記述にすること。
- ②開発物の記述項目、記載内容及び記載水準に対しては、予めIPAの了解を得ること。
- ③文章や図、写真等を引用する際には、引用部分それぞれにおいて出典元を明記する。また、IPAからの依頼(説明の追記や、独自の図表作成)については、適切に反映すること。
- ④納入物件に関して、他の著作権に抵触する事項がある場合は、著作権者と調整し解決すること。また、教材にイラスト等を使用する場合は、本業務の中で調達すること。
- ⑤教材作成の際は、少なくとも、色使い、色の組み合わせ、フォントは、色覚障がい者に可能な限り配慮したものとする。また、文字の色は、背景との間にはっきりした明度差をつけ、図や表については、色のみでの識別は行わないようにすること。
(参考：国立遺伝学研究所 ユニバーサルデザインにおける色覚バリアフリーへの提言)
<https://www.nig.ac.jp/color/handout1.pdf>)
- ⑥原則として2週に1回程度の頻度でIPAに作業状況を報告すること。個別の課題等については、IPA担当者に相談の上作業すること。本仕様書に定める以外の事項、なんらかの疑義が生じた場合は、IPAと協議すること。
- ⑦4.3で作成した作業計画に基づき、定められた期日までに当該業務を確実に実施し、7.2に定める納入物件を納入すること。
- ⑧不測の事態により、定められた期日までに作業を終了することが困難となった場合には、遅滞なくその旨をIPAに連絡し、その指示を受けること。この場合、作業が困難となった事案を速やかに解決し、作業の遅れを回復するように努めること。

5. 事業の実施体制

本業務を実施する事業者は、以下を満たす実施体制を構築すること。

- ①業務の役割を定めた実働可能な人数を確保し、役割を明確にすること。
- ②プロジェクトリーダーを置くこと。プロジェクトリーダーは、プロジェクト管理を行い、計画に従って工程管理を行い、作業の遅延等が生じた場合にはIPAに報告すること。
- ③プロジェクトリーダーは、過去5年間にプロジェクトリーダーの実績を3件以上有していること。
プロジェクトリーダーは、情報処理技術者試験のプロジェクトマネージャ試験または同等以上の試験の合格者であることが望ましい。
- ④教材開発者には、「サイバーセキュリティ経営ガイドライン」、「サイバー・フィジカル・セキュリティ対策フレームワーク」等について十分な知見を有するものを含むこと。(「別添3 参照資料等」を参照)
- ⑤教材開発者には、ITSS+(セキュリティ領域)やプラス・セキュリティ人材等のIT人材に係るスキル標準や役制定義について十分な知見を有するものを含むこと。

- ⑥教材開発者には、過去 5 年間に IT スキル標準レベル 4 以上の内容が含まれている情報セキュリティの教材の製作実績を 3 件以上有する者を含むこと。なお、効果の高い講習コンテンツを開発する手法（インストラクショナルデザインなど）に基づいた開発実績の豊富な者を含むことが望ましい。
- ⑦教材開発者には、情報処理安全確保支援士の資格を有する者を含むこと。なお、情報処理安全確保支援士の資格を有する者を複数含むことが望ましい。
- ⑧教材開発者には、実践講習の認定講師を含むことが望ましい。
- ⑨スケジュール管理、教材開発者との連絡・状況共有などのやり取り及び校正作業等、教材開発が円滑に進むように対応すること。
- ⑩品質評価を行う体制を実施体制に含めること。

6. 情報管理体制

6.1 情報管理体制

- ①本業務で知り得た情報を適切に管理するため、次の履行体制を確保し、発注者に対し「情報セキュリティを確保するための体制を定めた書面（「情報管理体制図」及び「情報取扱者名簿」（氏名、個人住所、生年月日、所属部署、役職等が記載されたもの））を契約前に提出し、担当部門の同意を得ること。（住所、生年月日については、必ずしも契約前に提出することを要しないが、その場合であっても担当部門から求められた場合は速やかに提出すること。）なお、情報取扱者名簿は、業務の遂行のため最低限必要な範囲で情報取扱者を掲載すること。

（確保すべき履行体制）

契約を履行する一環として契約相手方が収集、整理、作成等した一切の情報が、IPAが保護を要しないと確認するまでは、情報取扱者名簿に記載のある者以外に伝達又は漏えいされないことを保証する履行体制を有していること。

情報セキュリティインシデントが発生した場合、IPAの指示に基づき適切に対応すること。また、本件の一部を第三者（再請負先）に再請負する場合、本業務を実施する事業者は再請負先が十分な情報セキュリティ対策を実施していることを担保し、IPAの求めがあれば再請負先の情報セキュリティ対策の実施状況を確認・報告すること。

- ②本業務で知り得た一切の情報について、情報取扱者以外の者に開示又は漏えいしてはならないものとする。ただし、担当部門の承認を得た場合は、この限りではない。
- ③①の情報セキュリティを確保するための体制を定めた書面又は情報取扱者名簿に変更がある場合は、予め担当部門へ届出を行い、同意を得なければならない。
- ④IPAが情報セキュリティ対策の履行状況を確認する必要があるが生じた場合、本業務を実施する事業者は対応すること。
- ⑤情報セキュリティ対策が不十分であることが判明した場合、IPAと調整し、適切に対処すること。

6.2 履行完了後の情報の取扱い

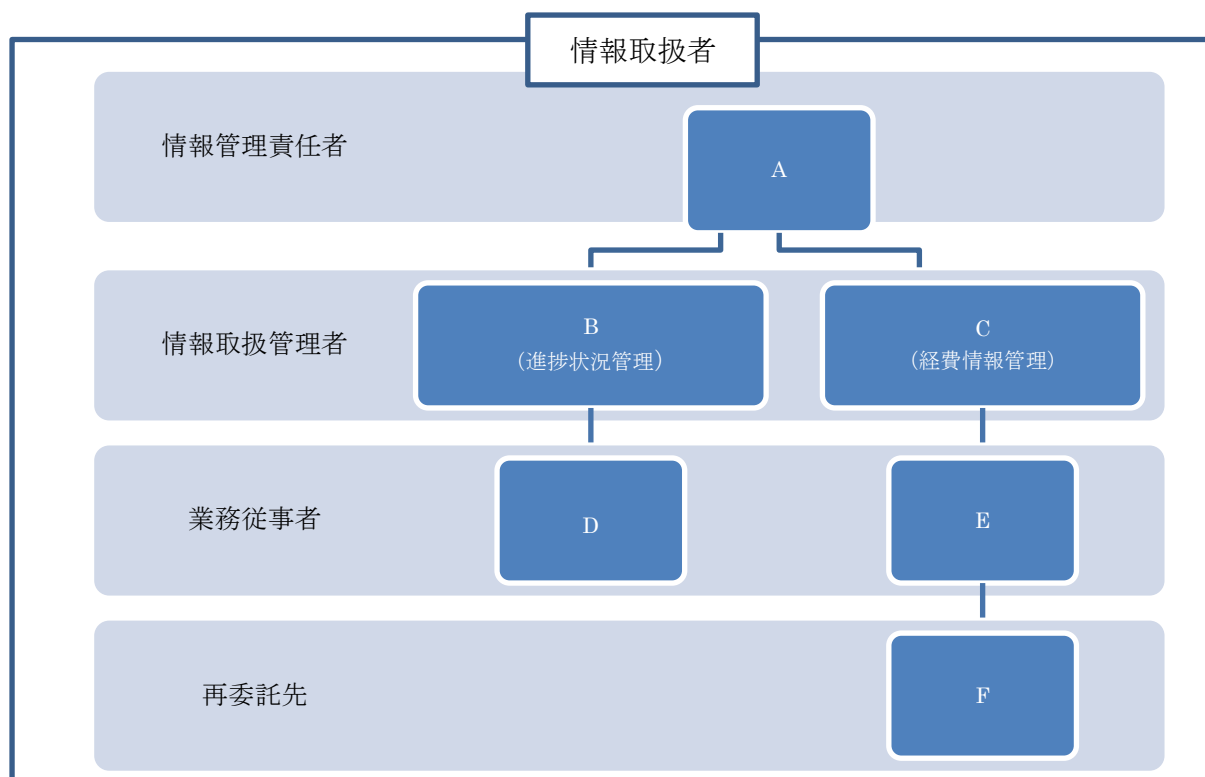
IPAから提供した資料又はIPAが指定した資料の取扱い（返却・削除等）については、担当職員の指示に従うこと。業務日誌を始めとする経理処理に関する資料については適切に保管すること。

情報取扱者名簿

	(しめい) 氏名	個人住所	生年月 日	所属部 署	役職	パスポート番号 及び国籍 (※4)
情報管理責任者(※1)	A					
情報取扱管理者(※2)	B					
	C					
業務従事者(※3)	D					
	E					
再委託先	F					

- (※1) 受託事業者としての情報取扱の全ての責任を有する者。必ず明記すること。
- (※2) 本委託業務の遂行にあたって主に保護すべき情報を取り扱う者ではないが、本委託業務の進捗状況などの管理を行うもので、保護すべき情報を取り扱う可能性のある者。
- (※3) 本委託業務の遂行にあたって保護すべき情報を取り扱う可能性のある者。
- (※4) 日本国籍を有する者及び法務大臣から永住の許可を受けた者(入管特例法の「特別永住者」を除く。)以外の者は、パスポート番号等及び国籍を記載。
- (※5) 個人住所、生年月日については、必ずしも契約前に提出することを要しないが、その場合であっても担当部門から求められた場合は速やかに提出すること。

情報管理体制図 (例)



【情報管理体制図に記載すべき事項】

- ・ 本委託業務の遂行にあたって保護すべき情報を取り扱う全ての者。(再委託先も含む。)
- ・ 委託業務の遂行のため最低限必要な範囲で情報取扱者を設定し記載すること。
- ・ 情報管理規則等を有している場合で上記例を満たす情報については、情報管理規則等 の内規の添付で代用可能。

7. 納入関連

7.1 納入期限・納入場所

①納入期限

中間納入 : 2025年2月28日(金)

最終納入 : 2025年5月30日(金)

②納入場所

〒113-6591

東京都文京区本駒込2丁目28番8号 文京グリーンコートセンターオフィス15階

独立行政法人情報処理推進機構 デジタル人材センター 国家資格・試験部 登録・講習グループ

7.2 納入物件

以下のドキュメントに係る電子データを収めた記録媒体(CD-RまたはDVD-R)を1部納入する。

また、検収用として紙媒体を1部と本業務の過程で作成した議事録・資料・図表等、及び入手したデータ、文献等の関連資料も併せて提出すること。

①中間納入

- 1) 個人学習用スライド
- 2) 《作成した場合》 個人学習用事前課題の検討結果記入様式
- 3) 理解度確認テスト(問題と解答例及び解説)
- 4) グループ討議当日の投影用スライド
- 5) 《作成した場合》 グループ討議結果を記入する様式
- 6) グループ討議当日のタイムテーブル
- 7) 講習効果測定の設定問(事前・事後)
- 8) 認定講師向け勉強会説明資料
- 9) 《作成した場合》 講習の質の確保に必要な資料等

②最終納入

4.2 ⑤の対応を行った下記を納入すること。

- 1) 個人学習用スライド
- 2) 《作成した場合》 個人学習用事前課題の検討結果記入様式
- 3) 理解度確認テスト(問題と解答例及び解説)
- 4) グループ討議当日の投影用スライド
- 5) 《作成した場合》 グループ討議結果を記入する様式
- 6) グループ討議当日のタイムテーブル
- 7) 講習効果測定の設定問(事前・事後)
- 8) 認定講師向け勉強会説明資料
- 9) 《作成した場合》 講習の質の確保に必要な資料等

8. 検収関連

納入物件の内容に関しては、調査内容及び対象に関して本仕様書に示された条件、項目を満たしているかについて確認を行う。また、品質については「2.背景・目的」で示された目的を満たすに十分か否かを基準に判断する。

実践講習コース概要

本業務で開発する実践講習のコース概要は、下記のとおりとする。

【全体概要】

1.スキルレベル	上級
2.コース形態	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ討議の事前準備として、e-ラーニングでの「個人学習」 ・Web 会議システムを用いたグループ討議
3.このコースの目的、ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・インシデント対応をテーマに、登録セキスペとして期待される役割にふさわしい情報セキュリティ実践のための具体的な技術や手法を、グループ討議や意見交換を通じて学習する。 ・登録セキスペ同士の相互研鑽（グループ討議や意見交換を実施）の場として位置付け、登録セキスペ同士の情報共有や人脈形成を推進する機会としても活用する。
4.達成目標	<p>登録セキスペとして、インシデント対応の際に必要なとされる実践的知識とインシデント対応のプロセスを、演習(ケーススタディ)を通して修得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修得した知識とプロセスを用い、インシデント発生時に対応ができるようになる。また、意思決定者に対する説明を疑似的に体験し、インシデント対応を実施する上で必要な関係者への説明ができるようになる。 ・情報処理安全確保支援士倫理綱領に基づき、自身が実施する業務において適切な判断や行動ができるようになる。
5.コース概要	<p>1. 個人学習 (e-ラーニング形式) 《標準学習時間：2 時間》</p> <p>知識 ①脅威の種類 ②インシデント対応手法 ③確認テスト</p> <p>2. グループ討議 (Web 会議システムを用いたりリモート形式) (※)</p> <p>技能 【トピックス検討】 インシデント検知 【ケーススタディ①】 インシデント対応 【ケーススタディ②】 予防策の検討</p> <p>振返 【振り返り】 気付きの整理</p>
6.ケーススタディ	あり (※)
7.確認テスト	あり
8.修了基準	<ul style="list-style-type: none"> ・個人学習・グループ討議を、本人が受講すること。 ・グループ討議は、やむをえないトラブル以外は参加すること。 ・グループ討議に積極的に参加すること。 ・受講終了時チェック・アンケートを提出していること。
9.推奨受講対象者	登録セキスペ登録から7年目以降の方に受講を推奨するコース

(※) グループ討議で取り扱うケーススタディ詳細については、次ページ以降の1. ～3. を参照のこと。

1. 【トピックス検討】 インシデント検知に関するケース

トピックス検討は、ケーススタディ①、ケーススタディ②に向けたアイスブレイクの位置づけも兼ねる。

(1) ケーススタディ設計の考え方

設定の主旨	想定企業で検知した情報セキュリティインシデントの可能性に関し、どのようなインシデントに発展し得るかを、グループディスカッションで検討し、対応案を発表する。
ケース	情報セキュリティ対策
目的	オンライン講習や個人学習で事前に学習した情報セキュリティ技術の知識を使い、検知初期段階で、想定される情報セキュリティインシデントとその影響に対し、想定力・発想力を発揮し洗い出しを行う。
何を考えさせるか	情報セキュリティインシデントの理解、インシデント対応の理解
対応するスキル項目との関係	情報セキュリティの脅威と影響、情報セキュリティインシデント対応

(2) ケーススタディのサンプル

状況	インシデント検知 ケースの仮想企業の職員が不審メールを受け取ったとのエスカレーションがあり、このほかに、業務システムのサービス停止など、いくつかのセキュリティインシデントを匂わせる検知情報の連絡が入った。
提供する情報	ネットワーク及びシステム概要図 A社の組織体制図（情報システム部門、総務部門、危機管理部門 等）
設問	CSIRT 責任者として、 設問 1：検知時点でどのようなインシデントに発展する可能性があるかを洗い出す。 設問 2：洗い出したものに対し、重要度の優先付けをする。 設問 3：検知内容の確認のためにすべきこと、検知時点で打てる策を洗い出す。
回答の観点	各設問において、オンライン講習や個人学習で事前に学習した内容等を参考に、次の観点から検討する。 設問 1：世の中の脅威トレンドも加味し、網羅的に洗い出しを行う。 設問 2：影響範囲を把握する。（IT サービスへの影響、業務への影響、守るべき業務やオペレーションに留意） 設問 3：誤報確認・状況把握を行う。（スピード感、優先度、先手の策等）

2. 【ケーススタディ①】 インシデント対応に関するケース

(1) ケーススタディ設計の考え方

設定の主旨	想定企業で発生した情報セキュリティインシデントへの対応を、グループディスカッションで検討し、対応案を洗い出す。
ケース	情報セキュリティ対策
目的	オンライン講習や個人学習で事前に学習した情報セキュリティ技術の知識を使い、情報セキュリティインシデントの原因に対し、現実的な対策案を検討する。
何を考えさせるか	情報セキュリティインシデントの理解、インシデント対応の理解
対応するスキル項目との関係	情報セキュリティインシデント管理

(2) ケーススタディのサンプル

状況	インシデント検知からその後の対応状況（受講者には当日提示） 検知内容をもとに調査した結果、一部の社員がランサムウェアに感染していることが判明、そのランサムウェアにより、業務システムの稼働に影響が発生し、CSIRTとして行った対応の途中経過までを状況として設定する。 （その中には、対応の失敗事項もいくつか含まれる）
提供する情報	インシデント対応状況、判明した事実等
設問	CSIRT 責任者として、 設問 1：被害拡大を抑えるための封じ込めの範囲と方法を決定する。 設問 2：インシデント対応として実施すべき事柄を洗い出す。
回答の観点	各設問において、オンライン講習や個人学習で事前に学習した内容等を参考に、次の観点から「封じ込め（インシデント初動対応）」および「根絶・復旧」を検討する。 設問 1：影響範囲を把握する。（IT サービスへの影響、業務への影響、守るべき業務やオペレーションに留意） 設問 2：システム面だけでなく、社内体制や対外対応も含めて、優先度付けを行う。

3. 【ケーススタディ②】 予防策の検討に関するケース

(1) ケーススタディ設計の考え方

設定の主旨	想定企業で発生した情報セキュリティインシデントへの再発防止策を、グループディスカッションで検討し、対策案を洗い出す。
ケース	情報セキュリティ対策
目的	情報セキュリティインシデントの原因に対し、情報セキュリティ技術の実践的な知識を使い、現実的な対策を検討する。
何を考えさせるか	情報セキュリティインシデントの理解、インシデント対応の理解。
対応するスキル項目との関係	情報セキュリティインシデント管理

(2) ケーススタディのサンプル

状況	インシデントによる影響 ケーススタディ①のインシデント対応のその後の状況として、機密情報の暴露に関する身代金の要求がされていることが判明した。
提供する情報	インシデント対応状況、判明した事実等
設問	CSIRT 責任者として、 設問 1：情報の暴露に関する身代金要求に対し、実施すべき事柄と身代金の支払いに関する是非について検討する。 設問 2：インシデントを発生させた原因を究明し、その再発防止策を考える。 設問 3：実施したインシデント対応の見直しのために必要な策を洗い出す。
回答の観点	各設問において、オンライン講習や個人学習で事前に学習した内容等を参考に、次の観点から「事故後の対応」を検討する。 設問 1：機密情報漏洩の事実確認、身代金要求に対する対応の懸念点 設問 2：インシデント状況のシナリオも検討対象にする。 技術的、人的・組織的な観点で原因を特定する。 原因を取り除くための対策を考える。 対策は予防・防止、検知、復旧の観点で検討する。 設問 3：実施したインシデント対応の中で、失策だった箇所・課題点を考える。 失策・課題を改善するための策を考える。 改善策は、効果、予算、期間も考慮して検討する。

4. 【振り返り】 気付きの整理

目的	次の点についてグループで共有し、言葉にすることで、「気付き」を実践に結びつけることを目的とする。 ・ 本日の講習を通じて気が付いたこと ・ 今後、業務を行う上で活かそうな事、今後取り組みたいこと
----	---

参照資料等

下記を参照資料とする。

〔知識〕

- IPA セキュリティセンター
 - 情報セキュリティ 10 大脅威 2023
<https://www.ipa.go.jp/security/10threats/10threats2023.html>
 - 重要なセキュリティ情報
<https://www.ipa.go.jp/security/security-alert/index.html>
 - テクニカルウォッチ
<https://www.ipa.go.jp/security/reports/technicalwatch/index.html>
 - 情報セキュリティ 調査・研究報告書
<https://www.ipa.go.jp/security/reports/index.html>
- JPCERT/CC
 - 注意喚起
<https://www.jpccert.or.jp/at/2024.html>
 - 早期警戒情報
<https://www.jpccert.or.jp/winfo/>
 - 四半期レポート
<https://www.jpccert.or.jp/report/>
- International Organization for Standardization
 - ISO/IEC15408-1:2009, ISO/IEC 15408-2:2008, ISO/IEC TR 20004:2015
<https://www.iso.org/home.html>
- Japan Vulnerability Notes
 - JVN
<https://jvn.jp/index.html>

〔技能〕

- IPA セキュリティセンター
 - 情報セキュリティ早期警戒パートナーシップガイドライン 2019 年版 公開ページ
https://www.ipa.go.jp/security/guide/vuln/partnership_guide.html
 - セキュリティ設定共通化手順 SCAP 概説
<https://www.ipa.go.jp/security/vuln/scap/scap.html>
 - 「セキュア・プログラミング講座」
<https://www.ipa.go.jp/archive/security/vuln/programming/index.html>
 - 「安全なウェブサイトの作り方」
<https://www.ipa.go.jp/security/vuln/websecurity/index.html>
- JPCERT/CC
 - インシデントの報告
<https://www.jpccert.or.jp/ir/>
- (日本語版) Japan Vulnerability Notes (JVN)
<https://jvn.jp/>

〔倫理〕

- RFC1087 倫理とインターネット
<https://www.nic.ad.jp/ja/tech/ipa/RFC1087JA.html>
- 情報処理学会 倫理綱領

<https://www.ipsj.or.jp/ipsjcode.html>

- ・ 情報処理学会 認定情報技術者 倫理要綱・行動規範

<https://www.ipsj.or.jp/CITP/CITPcode.html>

- ・ 日本技術士会 技術士倫理綱領

https://www.engineer.or.jp/c_topics/009/009289.html

- ・ 日本セキュリティ監査協会 監査人倫理規程

<https://www.jasa.jp/wp-content/uploads/docs/regulation/qualification/regull11.pdf>

- ・ 日本システム監査人協会 システム監査人倫理規定

<https://www.saaj.or.jp/gaiyo/rinri.html>

- ・ 日本公認会計士協会 倫理規則

https://jicpa.or.jp/specialized_field/2-22-0-2-20190618.pdf

- ・ コンプライアンス（法規制等）

個人情報保護法、マイナンバー法、不正競争防止法（営業秘密）、知的財産権（特許、商標、意匠等）、刑法。

以上

IV. 入札資料作成要領

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」

入札資料作成要領

独立行政法人情報処理推進機構

目 次

第1章 独立行政法人情報処理推進機構が入札者に提示する資料及び入札者が提出すべき資料

第2章 評価項目一覧に係る内容の作成要領

2.1 評価項目一覧の構成

2.2 遵守確認事項

2.3 提案要求事項

2.4 添付資料

第3章 提案書に係る内容の作成要領及び説明

3.1 提案書の構成及び記載事項

3.2 提案書様式

3.3 留意事項

本書は、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に係る入札資料の作成要領を取りまとめたものである。

第1章 独立行政法人情報処理推進機構が入札者に提示する資料及び入札者が提出すべき資料

独立行政法人情報処理推進機構（以下「機構」という。）は入札者に以下の表1に示す資料を提示する。入札者はこれを受け、以下の表2に示す資料を作成し、機構へ提出する。

[表1 機構が入札者に提示する資料]

資料名称	資料内容
① 仕様書	本件「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」の仕様を記述（目的・内容等）。
② 入札資料作成要領	入札者が、評価項目一覧及び提案書に記載すべき項目の概要等を記述。
③ 評価項目一覧	提案書に記載すべき提案要求事項一覧、必須項目及び任意項目の区分、得点配分等を記述。
④ 評価手順書	機構が入札者の提案を評価する場合に用いる評価方式、総合評価点の算出方法及び評価基準等を記述。

[表2 入札者が機構に提出する資料]

資料名称	資料内容
① 評価項目一覧の遵守確認欄及び提案書頁番号欄に必要事項を記入したもの	仕様書に記述された要件一覧を遵守又は達成するか否かに関し、遵守確認欄に○×を記入し、提案書頁番号欄に、該当する提案書の頁番号を記入したもの。
② 提案書	仕様書に記述された要求仕様をどのように実現するかを提案書にて説明したもの。主な項目は以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> ・入札者が提案する、調査内容、調査方法。 ・実施体制、スケジュール。 ・調査・報告書作成者のスキル ・補足資料(入札者の関連する実績の詳細)等

第2章 評価項目一覧に係る内容の作成要領

2.1 評価項目一覧の構成

評価項目一覧の構成及び概要説明を以下表3に示す。

[表3 評価項目一覧の構成の説明]

評価項目一覧における項番	事項	概要説明
0	遵守確認事項	「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」を実施する上で遵守すべき事項。これら事項に係る具体的内容の提案は求めず、全ての項目についてこれを遵守する旨を記述する。
1～3	提案要求事項	提案を要求する事項。これら事項については、入札者が提出した提案書について、各提案要求項目の必須項目及び任意項目の区分け、得点配分の定義に従いその内容を評価する。
4	添付資料	入札者が作成した提案の詳細を説明するための資料。これら自体は、直接評価されて点数が付与されることはない。 例：担当者略歴、会社としての実績、実施条件等

2.2 遵守確認事項

遵守確認事項における各項目の説明を以下に示す。

入札者は、別添「評価項目一覧の遵守確認事項」における「遵守確認」欄に必要事項を記載すること。遵守確認事項の各項目の説明に関しては、以下表4を参照すること。

[表4 遵守確認事項上の各項目の説明]

項目名	項目説明・記入要領	記入者
大項目～小項目	遵守確認事項の分類	機構
内容説明	遵守すべき事項の内容	機構
遵守確認	入札者は、遵守確認事項を実現・遵守可能である場合は○を、実現・遵守不可能な場合（実現・遵守の範囲等について限定、確認及び調整等が必要な場合等を含む）には×を記載する。	入札者

2.3 提案要求事項

提案要求事項における各項目の説明を以下に示す。

入札者は、別添「評価項目一覧の提案要求事項」における「提案書頁番号」欄に必要事項を記載すること。提案要求事項の各項目の説明に関しては、以下表5を参照すること。

[表5 提案要求事項上の各項目の説明]

項目名	項目説明・記入要領	記入者
大項目～小項目	提案書の目次(提案要求事項の分類)	機構
提案要求事項	入札者に提案を要求する内容	機構
評価区分	必ず提案すべき項目(必須)又は必ずしも提案する必要は無い項目(任意)の区分を設定している。 各項目について、記述があった場合、その内容に応じて配点を行う。	機構
得点配分	基礎点及び各項目に対する最大加点	機構
提案書頁番号	作成した提案書における該当頁番号を記載する。該当する提案書の頁が存在しない場合には空欄とする。評価者は各提案要求事項について、本欄に記載された頁のみを対象として採点を行う。	入札者

2.4 添付資料

添付資料における各項目の説明を以下表6に示す。

[表6 添付資料上の各項目の説明]

項目名	項目説明・記入要領	記入者
大項目～小項目	提案書の目次(提案要求事項の分類)	機構
資料内容	入札者が提案の詳細を説明するための資料	機構
提案の要否	必ず提案すべき項目(必須)又は必ずしも提案する必要は無い項目(任意)の区分を設定している。	機構
提案書頁番号	作成した提案書における該当頁番号を記載する。該当する提案書の頁が存在しない場合には空欄とする。	入札者

第3章 提案書に係る内容の作成要領及び説明

3.1 提案書の構成及び記載事項

以下に、別添「評価項目一覧」から[提案書の目次]の大項目を抜粋したものと及び求められる提案要求事項を表7に示す。提案書は、表7の項番、項目内容に従い、提案要求内容を十分に咀嚼した上で記述及び提案すること。なお、詳細は別添「評価項目一覧」を参照すること。

[表7 提案書目次及び提案要求事項]

提案書目次項番	大項目	求められる提案要求事項
1	業務内容	<ul style="list-style-type: none">開発対象、開発方針、開発事項、教材開発における留意事項、実施方法について記載すること。実施方法は、契約から納入まで、業務実施に必要な作業項目、主要マイルストーン、IPAへの提出・承認予定などを含めたスケジュール概要を記載すること。開発事項の課題や目的を充分理解した上で、効果を高めるための独自の創意工夫などの提案があれば記載すること。
2	事業の実施体制	<ul style="list-style-type: none">実務体制について記載すること。独自の創意工夫などの提案があれば記載すること。
3	ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する指標	<ul style="list-style-type: none">ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する認定又は行動計画の策定状況。※本項目を提案書に含める場合は、認定通知書等の写しを添付すること。
4	添付資料	<ul style="list-style-type: none">提案した内容の詳細を説明するための資料。例としては、実施担当者の専門知識、関連する資格や実施組織の類似事業の実績の詳細など。

3.2 提案書様式

- ① 提案書及び評価項目一覧はA4判カラーにて印刷し、特別に大きな図面等が必要な場合には、原則としてA3判にて提案書の中に折り込む。
- ② 上記は、電子媒体でも提出すること。その際のファイル形式は、原則として、Microsoft Office2013またはPDF形式のいずれかとする（これに拠りがたい場合は、機構まで申し出ること）。

3.3 留意事項

- ① 提案書を評価する者が特段の専門的な知識や商品に関する一切の知識を有しなくても評価が可能な提案書を作成する。なお、必要に応じて用語解説などを添付する。
- ② 提案に当たって、特定の製品を採用する場合は、当該製品を採用する理由を提案書中に記載するとともに、記載内容を証明及び補足するもの（製品紹介、パンフレット、比較表等）を添付する。
- ③ 入札者は提案の際、提案内容についてより具体的・客観的な詳細説明を行うための資料を、添付資料として提案書に含めることができる（その際、提案書本文と添付資料の対応が取れるようにする）。
- ④ 機構から連絡が取れるよう、提案書には連絡先（電話番号、FAX番号、及びメールアドレス）

を明記する。

- ⑤ 上記の提案書構成、様式及び留意事項に従った提案書ではないと機構が判断した場合は、提案書の評価を行わないことがある。また、補足資料の提出や補足説明等を求める場合がある。
- ⑥ 提案書、その他の書類は、本件における総合評価落札方式（加算方式）の技術評価に使用する。
- ⑦ 提案書は契約書に添付し、その提案遂行が担保されるため、実現可能な内容を提案すること。
- ⑧ 提案内容の一部を外注する場合は、その作業内容を明記すること。

V. 評価項目一覧

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」

評価項目一覧

独立行政法人情報処理推進機構

1. 評価項目一覧－遵守確認事項－

大項目	小項目	内容説明	遵守確認
0 遵守確認事項			
	0.1 納入物件	納入物件は日本語で作成し、図表等は本文中に挿入すること（ただし、固有名詞や文献参照等に外国語表記を用いることは可能）。	
	0.2 業務の範囲	Ⅲ.仕様書「4.本業務の内容」に記載している項目を一括して受託すること（部分についての提案は認めない）。	
	0.3 業務従事者の経験・能力	Ⅲ.仕様書「5.事業の実施体制」に記載している実施要員に関する要件を満たすこと。	
	0.4 スケジュール	作業計画を明確に定めた上で工程管理を行い、納入期限を守ること。	

2. 提案要求事項

提案書の目次		提案要求事項	評価区分	得点配分			提案書 頁番号
大項目	小項目			基礎点	加 点	合 計	
1. 業務内容							
	1.1 業務概要	仕様書 4.1. に記載された開発対象を開発する提案がされているか。	必須	5	-	5	
	1.2 作業内容	<ul style="list-style-type: none"> 仕様書 4.2 の①の表の内容および別添 2 「実践講習コース概要」記載の内容を十分に理解し、全てに関して具体的な作成方針や作成方法が記載されているか。また、それは妥当なものか。 	必須	5	-	265	
		<ul style="list-style-type: none"> 個人学習用スライドの内容について、グループ討議に必要な知識を事前に学習できる内容が提案されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> 個人学習用スライドの内容として事前課題が提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20		
		<ul style="list-style-type: none"> 理解度確認テストの設問の考え方について記載されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> 理解度確認テストの設問の考え方について、独自の創意工夫が提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	10		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の投影用スライドの内容について、受講者の理解を深めるために必要な内容や講習を円滑に進めるために必要な内容が提案されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の投影用スライドの内容について、認定講師に向けた指導要領として各スライドで説明すべき事項、注意点等の内容が提案されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の投影用スライドの内容として、認定講師がグループ討議当日の講習を進行しやすくするための工夫が提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日にグループ討議結果を記入する様式について提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	10		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の講習タイムテーブル作成の手順について提案されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> グループ討議当日の講習タイムテーブル作成の手順について、独自の創意工夫が提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	10		
		<ul style="list-style-type: none"> 講習効果測定の設定の考え方について記載されているか。 その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-		
		<ul style="list-style-type: none"> 講習効果測定の設定の考え方について、独自の創意工夫が提案されているか。 提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	10		

	<ul style="list-style-type: none"> ・認定講師向け勉強会説明資料の内容として、認定講師が、本講習のねらい、講習の構成、登壇時の注意点等を認識し、質の高い講習を開催できるような内容が提案されているか。 ・その内容は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・認定講師向け勉強会説明資料の内容として、認定講師が質の高い講習を開催しやすくするための独自の工夫が提案されているか。 ・提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20	
	<ul style="list-style-type: none"> ・本講習実施の際に、講習の質の確保のために他に必要と考えられるものについて記載されているか。 ・その内容は具体的かつ妥当であるか。 	任意	-	20	
	教材は、ITスキル標準 レベル4相当の内容を基本としているか。	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材において、登録セキスペの知識・技能の維持向上に対して有益だと思われる内容が提案されているか。 ・提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材で採り上げる範囲は、情報セキュリティの企画、設計、開発、運用等、登録セキスペが従事する全領域をカバーしているか。 ・また、登録セキスペとして参照すべき基準やガイドラインに準拠しているか。 	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材で採り上げる事例の選択基準や方法について、記載されているか。 ・その方法は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の作成において参考にする資料等は記載されているか。 ・その資料等は具体的かつ妥当であるか。一般に公開されている資料であるか。 	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材において、予習・復習および現場での活用が可能な仕組みについて、独自の創意工夫が提案されているか。 ・提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の内容の見直し、更新等の負荷軽減案について記載されているか。 ・その案は具体的かつ妥当であるか。 	必須	5	-	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の内容の見直し、更新等の負荷軽減案について、独自の創意工夫が提案されているか。 ・提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20	
	<ul style="list-style-type: none"> ・仕様書 4.2 全体に関して、教材において、登録セキスペのスキル維持・向上に効果的となるような独自の創意工夫が提案されているか。 ・提案内容は効果的かつ実現可能であるか。 	任意	-	20	
1.3 作業計画の作成	業務実施に必要な作業項目が明確になっているか。	必須	5	-	20
	仕様書 4.3 に記載されたマイルストーンを考慮して、実行可能な作業スケジュールとなっているか	必須	5	-	
	業務を効率的に進めるための工夫がなされていて、それが有効であることが説明されているか。	任意	-	10	
1.4 作業実施上の留意事項	仕様書 4.4 に記載された分かりやすい表現をするための提案がされているか。	必須	5	-	10
	仕様書 4.4 に記載された身体障がい者への合理的配慮の対応に関する提案がされているか。	必須	5	-	

2. 事業の実施体制							
2.1 事業の組織体制	本プロジェクト実施に当たって、プロジェクト管理を確実に行うことができると判断可能な根拠又は実績が示されているか。	必須	5	-	110		
	本調達に関わるプロジェクトメンバー（原則全て）の具体的な情報、要員数（事業を遂行可能な人数が確保されていること）、各自の役割、責任は明記されているか。	必須	5	-			
	プロジェクトリーダーは過去5年間にプロジェクトリーダーの実績を3件以上有しているか。	必須	5	-			
	プロジェクトリーダーは情報処理技術者試験のプロジェクトマネージャ試験または同等以上の試験の合格者であるか。	任意	-	10			
	教材開発者に「サイバーセキュリティ経営ガイドライン」、「サイバー・フィジカル・セキュリティ対策フレームワーク」等について十分な知見を有するものを含んでいるか。	必須	5	-			
	教材開発者に ITSS+（セキュリティ領域）やプラス・セキュリティ人材等の IT 人材に係るスキル標準や役割定義について十分な知見を有するものを含んでいるか。	必須	5	-			
	教材開発者に過去5年間に IT スキル標準レベル4以上の内容が含まれている情報セキュリティの教材の製作実績を3件以上有する者を含んでいるか。	必須	5	-			
	教材開発者に効果の高い講習コンテンツを開発する手法（インストラクショナルデザインなど）に基づいた開発実績の豊富な者を含んでいるか。	任意	-	20			
	教材開発者に情報処理安全確保支援士の資格を有する者を含んでいるか。	必須	5	-			
	教材開発者に情報処理安全確保支援士の資格を有する者を複数含んでいるか。	任意	-	20			
	教材開発者に実践講習の認定講師を含んでいるか。	任意	-	20			
	品質評価を行う体制を含んでいるか。	必須	5	-			
3. ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する指標							
3.1 ワーク・ライフ・バランスの推進	企業として、以下のいずれかに該当するワーク・ライフ・バランスの取組を推進しているか。 ①女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（女性活躍推進法）に基づく認定（えるぼし認定企業、プラチナえるぼし認定企業） ②次世代育成支援対策推進法（次世代法）に基づく認定（くるみん認定企業・トライくるみん認定企業・プラチナくるみん認定企業） ③青少年の雇用の促進等に関する法律（若者雇用促進法）に基づく認定（ユースエール認定企業）	任意	-	13	13		
	(合計)		130	293	423		

3. 添付資料

提案書の目次		資料内容	提案の要否	提案書 頁 番号
大項目	小項目			
4 添付資料				
4.1 実施体制及び調査・作成者略歴	・ 入札者の概要の分かる資料	任意		
	・ 本調査履行のための体制図	任意		
	・ 各業務従事者の略歴（氏名、所属、役職、学歴、職歴、業務経験、研修実績その他経歴、専門的知識その他の知見、母国語及び外国語能力、国籍等）	必須		
	・ 受託者の情報管理体制がわかる「情報管理体制図」、情報を取扱う者の氏名・住所・生年月日・所属部署・役職等がわかる「情報取扱者名簿」を契約時に提出できることを確約する。	必須		
4.2 会社としての実績	・ 本調査の類似案件実績	任意		
	・ 本調査に有用な領域での資格、実績等	任意		
	・ ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する認定通知書等の写し	任意		
4.3 その他	・ その他提案内容を補足する説明、調査実施における前提条件等	任意		

VI. 評価手順書

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」

評価手順書(加算方式)

独立行政法人情報処理推進機構

本書は、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に係る評価手順を取りまとめたものである。落札方式、評価の手続き及び加点方法を以下に示す。

第1章 落札方式及び得点配分

1.1 落札方式

次の要件を共に満たしている者のうち、「1.2 総合評価点の計算」によって得られた数値の最も高い者を落札者とする。

- ① 入札価格が予定価格の制限の範囲内であること。
- ② 「V. 評価項目一覧」の遵守確認事項及び評価項目の必須区分を全て満たしていること。

1.2 総合評価点の計算

$$\text{総合評価点} = \text{技術点} + \text{価格点}$$

技術点 = 基礎点 + 加点

価格点 = 価格点の配分 × (1 - 入札価格 ÷ 予定価格)

※小数点第2位以下切捨て

1.3 得点配分

技術点に関し、必須及び任意項目の配分を423点、価格点の配分を212点とする。

技術点	423点
価格点	212点

第2章 評価の手続き

2.1 一次評価

一次評価として、「V. 評価項目一覧」の各事項について、次の要件をすべて満たしているか審査を行う。一次評価で合格した提案書について、次の「2.2 二次評価」を行う。

- ① 「1. 遵守確認事項」の「遵守確認」欄に全て「○」が記入されていること。
- ② 「2. 提案要求事項」の「提案書頁番号」欄に、提案書の頁番号が記入されていること。
- ③ 「3. 添付資料」の提案が必須となっている資料の「提案書頁番号」欄に頁番号が記入されていること。

2.2 二次評価

上記「2.1 一次評価」で合格した提案書に対し、次の「第3章 評価項目の加点方法」に基づき技術評価を行う。なお、ヒアリングを実施した場合には、ヒアリングにより得られた評価を加味するものとする。

評価に当たっては、複数の評価者で各項目を評価し、各評価者の評価結果（得点）の平均値（小数点第2位以下切捨て）をもって技術点とする。

2.3 総合評価点の算出

以下の技術点と価格点を合計し、総合評価点を算出する。

- ① 「2.2 二次評価」により算定した技術点
- ② 「1.2 総合評価点の計算」で定めた計算式により算定した価格点

第3章 評価項目の加点方法

3.1 評価項目得点構成

評価項目（提案要求事項）毎の得点については、評価区分に応じて、必須項目は基礎点、任意項目は加点として付与する。

なお、評価項目毎の基礎点、加点の得点配分は「V. 評価項目一覧」の「2. 評価項目一覧-提案要求事項-」を参照すること。

3.2 基礎点評価

提案内容が、必須項目を満たしている場合に基礎点を付与し、そうでない場合は0点とする。従って、一つでも必須項目を満たしていないと評価（0点）した場合は、その入札者を**不合格**とし、価格点の評価は行わない。

3.3 加点評価

任意項目について、提案内容に応じて下表の評価基準に基づき加点を付与する。

評価 ランク	評価基準	項目別得点	
S	通常の想定を超える卓越した提案内容である。	20	10
A	通常想定される提案としては最適な内容である。	12	6
B	概ね妥当な内容である。	6	3
C	内容が不十分である。	0	0

ただし、「4 ワーク・ライフ・バランス等の推進に関する指標」については、下表の評価基準に基づき加点を付与する。複数の認定等が該当する場合は、最も配点が高い区分により加点を付与する。

認定等の区分		項目別得点
女性活躍推進法に基づく認定 (えるぼし認定企業・プラチナ えるぼし認定企業)	プラチナえるぼし (※1)	13
	えるぼし3段階目 (※2)	10
	えるぼし2段階目 (※2)	9
	えるぼし1段階目 (※2)	5
	行動計画策定 (※3)	2
次世代法に基づく認定 (くるみん認定企業・トライく るみん認定企業・プラチナく るみん認定企業)	プラチナくるみん (※4)	13
	くるみん (令和4年4月1日以降の基 準) (※5)	9
	くるみん (平成29年4月1日～令和4年 3月31日までの基準) (※6)	8
	トライくるみん (※7)	7
	くるみん (平成29年3月31日までの基 準) (※8)	5

- ※1 女性の職業生活における活躍の推進に関する法律等の一部を改正する法律（令和元年法第24号）による改正後の女性活躍推進法第12条の規定に基づく認定
- ※2 女性活躍推進法第9条の規定に基づく認定
なお、労働時間等の働き方に係る基準は満たすことが必要。
- ※3 常時雇用する労働者の数が100人以下の事業主に限る（計画期間が満了していない行動計画を策定している場合のみ）。
- ※4 次世代法第15条の2の規定に基づく認定
- ※5 次世代法第13条の規定に基づく認定のうち、次世代育成支援対策推進法施行規則の一部を改正する省令（令和3年厚生労働省令第185号。以下「令和3年改正省令」という。）による改正後の次世代育成支援対策推進法施行規則（以下「新施行規則」という。）第4条第1項第1号及び第2号の規定に基づく認定
- ※6 次世代法第13条の規定に基づく認定のうち、令和3年改正省令による改正前の次世代育成支援対策推進法施行規則第4条又は令和3年改正省令附則第2条第2項の規定に基づく認定（ただし、※8の認定を除く。）
- ※7 次世代法第13条の規定に基づく認定のうち、新施行規則第4条第1項第3号及び第4号の規定に基づく認定
- ※8 次世代法第13条の規定に基づく認定のうち、次世代育成支援対策推進法施行規則等の一部を改正する省令（平成29年厚生労働省令第31号。以下「平成29年改正省令」という。）による改正前の次世代育成支援対策推進法施行規則第4条又は平成29年改正省令附則第2条第3項の規定に基づく認定

Ⅶ. その他関係資料

独立行政法人情報処理推進機構入札心得

(趣 旨)

第1条 独立行政法人情報処理推進機構（以下「機構」という。）の契約に係る一般競争又は指名競争（以下「競争」という。）を行う場合において、入札者が熟知し、かつ遵守しなければならない事項は、関係法令、機構会計規程及び入札説明書に定めるもののほか、この心得に定めるものとする。

(仕様書等)

第2条 入札者は、仕様書、図面、契約書案及び添付書類を熟読のうえ入札しなければならない。

2 入札者は、前項の書類について疑義があるときは、関係職員に説明を求めることができる。

3 入札者は、入札後、第1項の書類についての不明を理由として異議を申し立てることができない。

(入札保証金及び契約保証金)

第3条 入札保証金及び契約保証金は、全額免除する。

(入札の方法)

第4条 入札者は、別紙様式による入札書を直接又は郵便等で提出しなければならない。

(入札書の記載)

第5条 落札決定に当たっては、入札書に記載された金額に当該金額の10パーセントに相当する額を加算した金額をもって落札価格とするので、入札者は消費税に係る課税事業者であるか免税事業者であるかを問わず、見積もった契約金額の110分の100に相当する金額を入札書に記載すること。

(直接入札)

第6条 直接入札を行う場合は、入札書を封筒に入れ、封緘のうえ入札者の氏名を表記し、予め指定された時刻までに契約担当職員等に提出しなければならない。この場合において、入札書とは別に提案書及び証書等の書類を添付する必要がある入札にあっては、入札書と併せてこれら書類を提出しなければならない。

2 入札者は、代理人をして入札させるときは、その委任状を持参させなければならない。

(郵便等入札)

第7条 郵便等入札を行う場合には、二重封筒とし、入札書の中封筒に入れ、封緘のうえ入札者の氏名、宛先、及び入札件名を表記し、予め指定された時刻までに到着するように契約担当職員等あて書留で提出しなければならない。この場合において、入札書とは別に提案書及び証書等の書類を添付する必要がある入札にあっては、入札書と併せてこれら書類を提出しなければならない。

2 入札者は、代理人をして入札させるときは、その委任状を同封しなければならない。

(代理人の制限)

第8条 入札者又はその代理人は、当該入札に対する他の代理をすることができない。

2 入札者は、予算決算及び会計令（昭和22年勅令第165号、以下「予決令」という。）第71条第1項各号の一に該当すると認められる者を競争に参加することが出来ない期間は入札代理人とすることができない。

(条件付きの入札)

第9条 予決令第72条第1項に規定する一般競争に係る資格審査の申請を行ったものは、競争に参加する者に必要な資格を有すると認められること又は指名競争の場合にあっては指名されることを条件に入札書を提出することができる。この場合において、当該資格審査申請書の審査が開札日までに終了しないとき又は資格を有すると認められなかったとき若しくは指名されなかったときは、当該入札書は落札の対象としない。

(入札の取り止め等)

第10条 入札参加者が連合又は不穩の行動をなす場合において、入札を公正に執行することができないと認められるときは、当該入札者を入札に参加させず又は入札の執行を延期し、若しくは取り止めることがある。

(入札の無効)

第11条 次の各号の一に該当する入札は、無効とする。

- (1) 競争に参加する資格を有しない者による入札
- (2) 指名競争入札において、指名通知を受けていない者による入札
- (3) 委任状を持参しない代理人による入札
- (4) 記名押印（外国人又は外国法人にあっては、本人又は代表者の署名をもって代えることができる。）を欠く入札
- (5) 金額を訂正した入札
- (6) 誤字、脱字等により意思表示が不明瞭である入札
- (7) 明らかに連合によると認められる入札
- (8) 同一事項の入札について他人の代理人を兼ね又は2者以上の代理をした者の入札
- (9) 入札者に求められる義務を満たすことを証明する必要がある入札にあっては、証明書が契約担当職員等の審査の結果採用されなかった入札
- (10) 入札書受領期限までに到着しない入札
- (11) 暴力団排除に関する誓約事項（別記）について、虚偽が認められた入札
- (12) その他入札に関する条件に違反した入札

(開 札)

第12条 開札には、入札者又は代理人を立ち合わせて行うものとする。ただし、入札者又は代理人が立会わない場合は、入札執行事務に関係のない職員を立会わせて行うものとする。

(調査基準価格、低入札価格調査制度)

第13条 工事その他の請負契約（予定価格が1千万円を超えるものに限る。）について機構会計規程細則第26条の3第1項に規定する相手方となるべき者の申込みに係る価格によっては、その者により当該契約の内容に適合した履行がされないこととなるおそれがあると認められる場合の基準は次の各号に定める契約の種類ごとに当該各号に定める額（以下「調査基準価格」という。）に満たない場合とする。

- (1) 工事の請負契約 その者の申込みに係る価格が契約ごとに3分の2から10分の8.5の範囲で契約担当職員等の定める割合を予定価格に乗じて得た額
- (2) 前号以外の請負契約 その者の申込みに係る価格が10分の6を予定価格に乗じて得た額
- 2 調査基準価格に満たない価格をもって入札（以下「低入札」という。）した者は、事後の資料提出及び契約担当職員等が指定した日時及び場所で実施するヒアリング等（以下「低入札価格調査」という。）に協力しなければならない。
- 3 低入札価格調査は、入札理由、入札価格の積算内訳、手持工事等の状況、履行体制、国及び地方公共団体等における契約の履行状況等について実施する。

(落札者の決定)

第14条 一般競争入札最低価格落札方式（以下「最低価格落札方式」という。）にあっては、有効な入札を行った者のうち、予定価格の制限の範囲内で最低の価格をもって入札した者を落札者とする。また、一般競争入札総合評価落札方式（以下「総合評価落札方式」という。）にあっては、契約担当職員等が採用できると判断した提案書を入札書に添付して提出した入札者であって、その入札金額が予定価格の制限の範囲内で、かつ提出した提案書と入札金額を当該入札説明書に添付の評価手順書に記載された方法で評価、計算し得た評価値（以下「総合評価点」という。）が最も高かった者を落札者とする。

- 2 低入札となった場合は、一旦落札決定を保留し、低入札価格調査を実施の上、落札者を決定する。
- 3 前項の規定による調査の結果その者により当該契約の内容に適合した履行がされないおそれがあると認められるとき、又はその者と契約を締結することが公正な取引の秩序を乱すこととなるおそれがある著しく不適當であると認められるときは、次の各号に定める者を落札者とすることがある。
 - (1) 最低価格落札方式 予定価格の制限の範囲内の価格をもって入札をした他の者のうち、最低の価格をもって入札した者

(2) 総合評価落札方式 予定価格の制限の範囲内の価格をもって入札をした他の者のうち、総合評価点が最も高かった者

(再度入札)

第 15 条 開札の結果予定価格の制限に達した価格の入札がないときは、直ちに再度の入札を行う。なお、開札の際に、入札者又はその代理人が立ち会わなかった場合は、再度入札を辞退したものとみなす。

2 前項において、入札者は、代理人をして再度入札させるときは、その委任状を持参させなければならない。

(同価格又は同総合評価点の入札者が二者以上ある場合の落札者の決定)

第 16 条 落札となるべき同価格又は同総合評価点の入札をした者が二者以上あるときは、直ちに当該入札をした者又は第 12 条ただし書きにおいて立ち会いをした者にくじを引かせて落札者を決定する。

2 前項の場合において、当該入札をした者のうちくじを引かない者があるときは、これに代わって入札事務に関係のない職員にくじを引かせるものとする。

(契約書の提出)

第 17 条 落札者は、契約担当職員等から交付された契約書に記名押印（外国人又は外国法人が落札者である場合には、本人又は代表者が署名することをもって代えることができる。）し、落札決定の日から 5 日以内（期終了の日が行政機関の休日に関する法律（昭和 63 年法律第 91 号）第 1 条に規定する日に当たるときはこれを算入しない。）に契約担当職員等に提出しなければならない。ただし、契約担当職員等が必要と認めた場合は、この期間を延長することができる。

2 落札者が前項に規定する期間内に契約書を提出しないときは、落札はその効力を失う。

(入札書に使用する言語及び通貨)

第 18 条 入札書及びそれに添付する仕様書等に使用する言語は、日本語とし、通貨は日本国通貨に限る。

(落札決定の取消し)

第 19 条 落札決定後であっても、この入札に関して連合その他の事由により正当な入札でないことが判明したときは、落札決定を取消することができる。

以上

暴力団排除に関する誓約事項

当社（個人である場合は私、団体である場合は当団体）は、下記の「契約の相手方として不適当な者」のいずれにも該当しません。

この誓約が虚偽であり、又はこの誓約に反したことにより、当方が不利益を被ることとなっても、異議は一切申し立てません。

記

1. 契約の相手方として不適当な者

- (1) 法人等（個人、法人又は団体をいう。）が、暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ。）であるとき又は法人等の役員等（個人である場合はその者、法人である場合は役員又は支店若しくは営業所（常時契約を締結する事務所をいう。）の代表者、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。以下同じ。）が、暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるとき
- (2) 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき
- (3) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき
- (4) 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれと社会的に非難されるべき関係を有しているとき

上記事項について、入札書の提出をもって誓約します。

(様式 1)

年 月 日

独立行政法人情報処理推進機構 デジタル人材センター 国家資格・試験部
登録・講習グループ 担当者殿

質 問 書

「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」に関する質問書を提出します。

法人名	
所属部署名	
担当者名	
電話番号	
E-mail	

質問書枚数
枚中
枚目

<質問箇所について>

資料名	例) ○○書
ページ	例) P○
項目名	例) ○○概要
質問内容	

備考

1. 質問は、本様式1枚につき1問とし、簡潔にまとめて記載すること。
2. 質問及び回答は、IPAのホームページに公表する。(電話等による個別回答はしない。)また、質問者自身の既得情報(特殊な技術、ノウハウ等)、個人情報に関する内容については、公表しない。

(様式 2)

年 月 日

独立行政法人情報処理推進機構 理事長 殿

所在地

商号又は名称

代表者氏名
(又は代理人)

印

委任状

私は、下記の者を代理人と定め、「情報処理安全確保支援士の実践講習教材開発業務」の入札に関する一切の権限を委任します。

代理人(又は復代理人)

所在地

所属・役職名

氏名

使用印鑑



(参 考)

予算決算及び会計令【抜粋】

(一般競争に参加させることができない者)

第70条 契約担当官等は、売買、貸借、請負その他の契約につき会計法第二十九条の三第一項の競争（以下「一般競争」という。）に付するときは、特別の理由がある場合を除くほか、次の各号のいずれかに該当する者を参加させることができない。

- 一 当該契約を締結する能力を有しない者
- 二 破産手続開始の決定を受けて復権を得ない者
- 三 暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成三年法律第七十七号）第三十二条第一項各号に掲げる者

(一般競争に参加させないことができる者)

第71条 契約担当官等は、一般競争に参加しようとする者が次の各号のいずれかに該当すると認められるときは、その者について三年以内の期間を定めて一般競争に参加させないことができる。その者を代理人、支配人その他の使用人として使用する者についても、また同様とする。

- 一 契約の履行に当たり故意に工事、製造その他の役務を粗雑に行い、又は物件の品質若しくは数量に関して不正の行為をしたとき。
 - 二 公正な競争の執行を妨げたとき又は公正な価格を害し若しくは不正の利益を得るために連合したとき。
 - 三 落札者が契約を結ぶこと又は契約者が契約を履行することを妨げたとき。
 - 四 監督又は検査の実施に当たり職員の職務の執行を妨げたとき。
 - 五 正当な理由がなくて契約を履行しなかつたとき。
 - 六 契約により、契約の後に代価の額を確定する場合において、当該代価の請求を故意に虚偽の事実に基づき過大な額で行つたとき。
 - 七 この項（この号を除く。）の規定により一般競争に参加できないこととされている者を契約の締結又は契約の履行に当たり、代理人、支配人その他の使用人として使用したとき。
- 2 契約担当官等は、前項の規定に該当する者を入札代理人として使用する者を一般競争に参加させないことができる。